

平成30年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

平成30年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年

- 小学校、義務教育学校前期課程、特別支援学校小学部の第6学年の児童
- 中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校、特別支援学校中学部の第3学年の生徒

(3) 調査の内容

- ①教科に関する調査（国語、算数・数学・理科）
 - ・主として「知識」に関する問題（A）
 - ・主として「活用」に関する問題（B）
- ②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査
 - ・児童生徒に対する調査（児童生徒質問紙調査）
 - ・学校に対する調査（学校質問紙調査）

(4) 調査の方式

悉皆調査

(5) 調査の実施日

平成30年 4月17日（火）

(6) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校16校 881名 中学校 8校 839名 ※北進小中学校を除く市内小中学校

*学校質問紙調査の結果について

平成30年度の調査では、調査項目が大幅に変更となり、これまでの分析に用いていた多くの質問項目が使用できなくなった。このため、次の4観点から質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

- ① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。
- ② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。
- ③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。
- ④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育委員会の分類方法による9段階)

相当高い	・・・	7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	・・・	-1ポイント以下-3ポイント未満
高い	・・・	5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	・・・	-3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	・・・	3ポイント以上5ポイント未満	低い	・・・	-5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	・・・	1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	・・・	-7ポイント以下
同様	・・・	±1ポイント			

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値

小学校教科全体		国語A	国語B	算数A	算数B	理 科
平均正答数	千歳市	8.0 問/12 問	3.9 問/8 問	8.7 問/14 問	4.4 問/10 問	8.9 問/16 問
	全 道	8.4 問/12 問	4.2 問/8 問	8.7 問/14 問	4.9 問/10 問	9.4 問/16 問
	全 国	8.5 問/12 問	4.4 問/8 問	8.9 問/14 問	5.1 問/10 問	9.6 問/16 問
平均正答率	千歳市	67%(66.7%)	49%(48.8%)	62%(62.1%)	44%(44.0%)	56%(55.6%)
	全 道	70%(70.1%)	53%(52.7%)	62%(62.2%)	49%(48.7%)	59%(58.8%)
	全 国	70.7%	54.7%	63.5%	51.5%	60.3%
全道との比較		やや低い	やや低い	同様	やや低い	やや低い
全国との比較		やや低い	低い	ほぼ同様 (下位)	相当低い	やや低い

国語については、国語Aが全国より「やや低い」、国語Bは「低い」という結果であった。

算数については、算数Aは全国と「ほぼ同様(下位)」であったが、算数Bは、全国と比較して相当低い状況が見られ、活用力の育成に課題が見られる。

理科については、全国との差が広がり、3年前の調査と同様に「やや低い」という結果であった。

国語Aは、全国を下回り、その差は-4.0ポイント(前年度-1.5ポイント)に広がった。領域別では「話すこと・聞くこと」と「読むこと」の領域については、全国との差が縮まったが、「書くこと」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の2領域については全国との差が広がった。

国語Bは、全国を下回り、その差は前年度より5.9ポイント(前年度-2.5)に広がった。国語Aに対し国語Bの平均正答率の低下が大きく、活用力の育成に課題が見られる。領域別では、「読むこと」の領域については、全国との差が縮まったものの、その差は依然として大きい状況が続いている。「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域については、全国との差が広がった。

算数Aは、9段階の比較区分が「全国と同様(上位)」から「全国と同様(下位)」となったが、全国との平均正答率の差は-1.4ポイントであり、各学校での基礎的な学力の向上に向けた取組により着実に力を付けてきている状況が見られる。領域別では、「量と測定」領域の正答率が全国と同様であったが、「数と計算」「図形」「数量関係」領域については、全国平均を下回った。

算数Bは、全国との差が-7.5ポイント(前年度-2.3ポイント)に広がり、全国より相当低く、活用力の育成に課題が見られる。領域別では、全国との差が縮まったのは「図形」領域だけであり、「数と計算」「量と測定」「数量関係」の3領域については、全国平均を下回った。問題形式別の正答率は、「記述式問題」が低く、言葉や数・式を使って「理由」や「方法」を書くことに課題が見られる。

理科は、全国平均を下回り、全国との差は-4.7ポイント(平成27年度の調査では、-3.3ポイント)となった。領域別では、「生命」領域については、全国との差が縮まったが、「物質」「エネルギー」「地球」の3領域については、全国平均を下回り、全国との差が広がった。

(2) 中学校教科全体

中学校教科全体		国語 A	国語 B	数学 A	数学 B	理 科
平均正答数	千歳市	23.9 問/32 問	5.3 問/9 問	22.8 問/36 問	6.3 問/14 問	17.9 問/27 問
	全 道	24.5 問/32 問	5.5 問/9 問	23.4 問/36 問	6.4 問/14 問	18.0 問/27 問
	全 国	24.3 問/32 問	5.5 問/9 問	23.8 問/36 問	6.6 問/14 問	17.9 問/27 問
平均正答率	千歳市	75%(74.7%)	59%(58.9%)	63%(63.3%)	45%(45.0%)	66%(66.3%)
	全 道	77%(76.6%)	61%(61.2%)	65%(64.9%)	46%(45.8%)	67%(66.7%)
	全 国	76.1%	61.2%	66.1%	46.9%	66.1%
全道との比較		ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	同様	同様
全国との比較		ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	ほぼ同様 (下位)	同様

国語については、国語 A、国語 B とともに前年度と同様に、全国と「ほぼ同様(下位)」という結果であった。

数学については、数学 A、数学 B とともに「やや低い」から全国と「ほぼ同様」となり改善が見られた。

理科は、平成 27 年度の調査と同様に平均正答率が全国を上回り、全国と「同様」という結果であった。

国語 A は、全国を 1.4 ポイント下回ったが、全国との差は 1.4 ポイント縮まった。領域別では、「話すこと・聞くこと」の領域の正答率が全国を上回り、「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の 2 領域については、全国平均を下回ったものの、全国の差は縮まった。「書くこと」の領域については、3 年連続全国との差に変化は見られない。

国語 B は、全国を 2.3 ポイント下回ったが、全国との差は 0.4 ポイント縮まった。領域別では、「書くこと」「読むこと」の 2 領域とともに全国平均を下回り、全国との差が広がった。本年度は「話すこと・聞くこと」の領域の問題が 3 問出題され、正答率は全国と同様であったことが国語 B 全体の正答率の上昇につながった。

数学 A は、全国を 2.8 ポイント下回ったが、全国との差は 0.4 ポイント縮まり、9 段階の比較区分は、「やや低い」から「全国と同様(下位)」となり改善がみられる。領域別では、すべての領域で全国との差を縮めているが、上昇幅は小さく前年度の正答率を維持した状況となっている。

数学 B は、全国を 1.9 ポイント下回ったが、全国との差は 1.9 ポイント縮まり 9 段階の比較区分は、「やや低い」から「全国と同様(下位)」となり改善がみられる。領域別では、「図形」領域については全国との差がわずかに広がったが、「数と式」「関数」「資料の活用」の 3 領域については、正答率が上がり全国との差が縮まった。

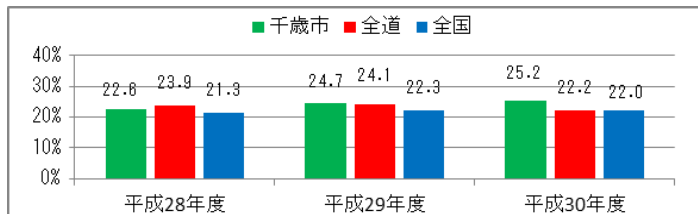
理科は、3 年前の調査と同様に全国の平均正答率を上回った。領域別では、「物理的領域」「化学的領域」「生物的領域」の 3 領域は全国を上回ったが、「地学的領域」は、全国をやや下回った。

(3) 小学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

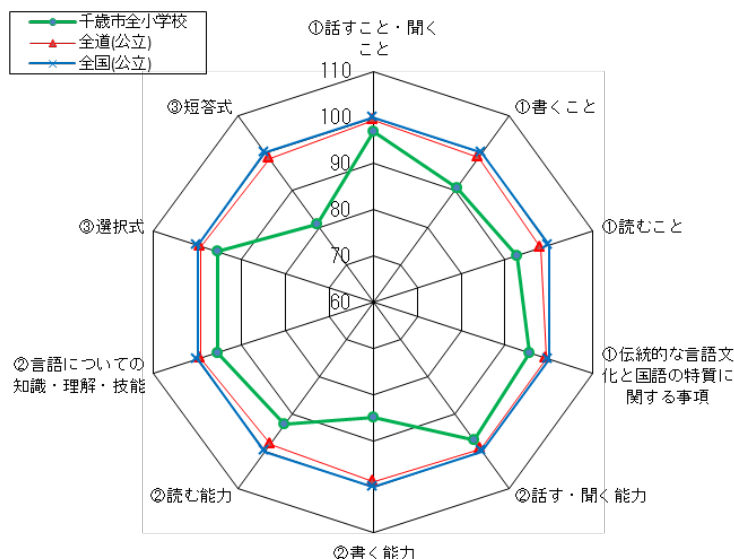
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	68.7 98.1	70.8 97.1	73.3 98.0	66.7 94.3
全 道	68.1 97.3	71.0 97.4	73.7 98.5	70.1 99.2
全 国	70.0 100	72.9 100	74.8 100	70.7 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】



下位層の割合は、3 年連続増加し、全国との差が広がってきている。上位層の割合が全国より低い状況が見られる。

【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】

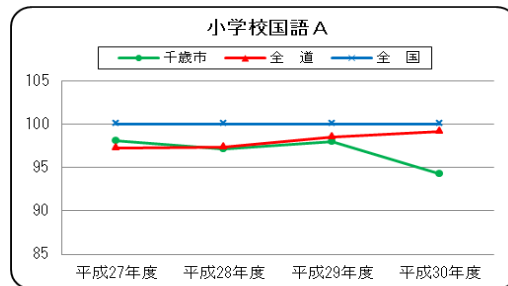


【レーダーチャートの各項目について】
「①」は学習指導要領の項目「②」は評価の観点 「③」は問題形式

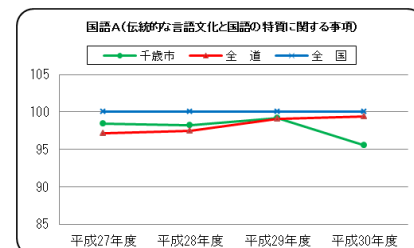
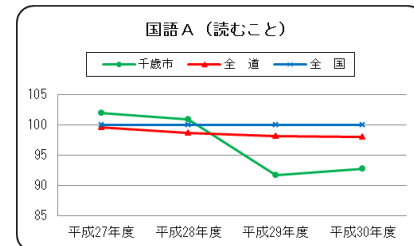
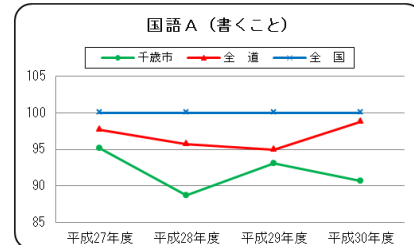
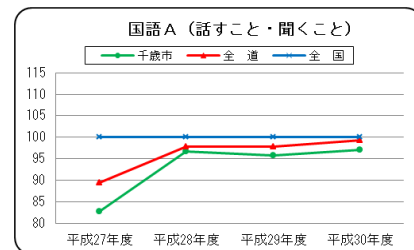
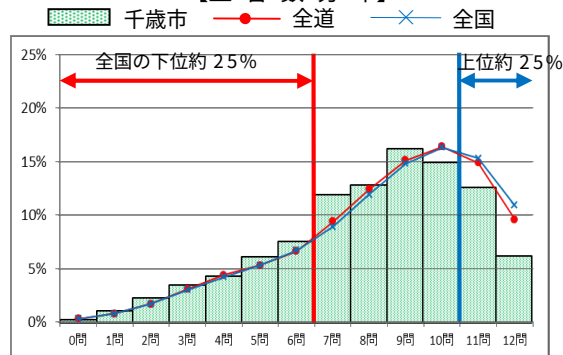
「読むこと」「書くこと」に課題が見られる。

「読むこと」については、全国との差が縮まったが、依然として全国との差が大きい状況は改善されていない。「書くこと」についても、前年度を下回り全国との差がさらに拡大しており、「読むこと」「書くこと」に課題が見られる。「話すこと・聞くこと」は、全国とほぼ同様であるが、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、慣用句の意味や敬語の使い方に関する問題の正答率が低く前年度を下回った。

全国との差が大きい「書く能力」の育成は緊要な課題である。書くことの指導においては、相手や目的、意図に応じ、調べたことや考えたことなどについて全体の構成を整えたり、下書きをよりよく推敲したりして書く能力を高めることが求められる。その際、礼状や依頼状、意見文、紹介文、記録文、推薦文などの様々な文章の種類や形態の特徴を踏まえた上で、一連のプロセスに即して書くことができるようにする必要がある。



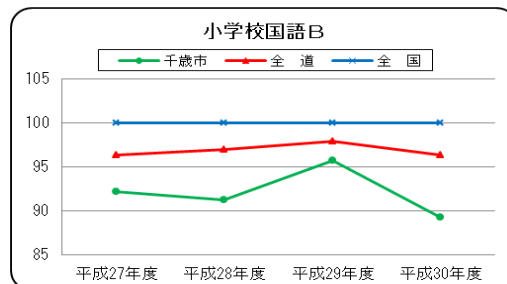
【正 答 数 分 布】



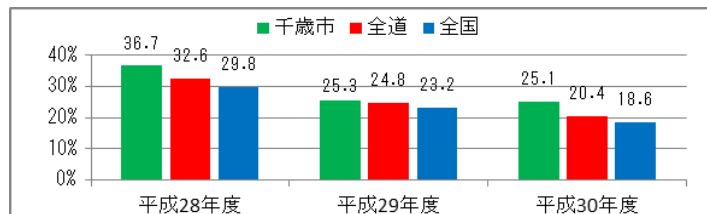
(4) 小学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
千歳市	60.3 92.2	52.7 91.2	55.0 95.7	48.8 89.2
全道	63.0 96.3	56.0 96.9	56.3 97.9	52.7 96.3
全国	65.4 100	57.8 100	57.5 100	54.7 100

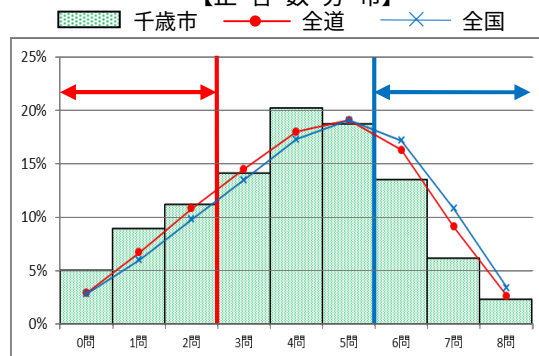


【全国の下位25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

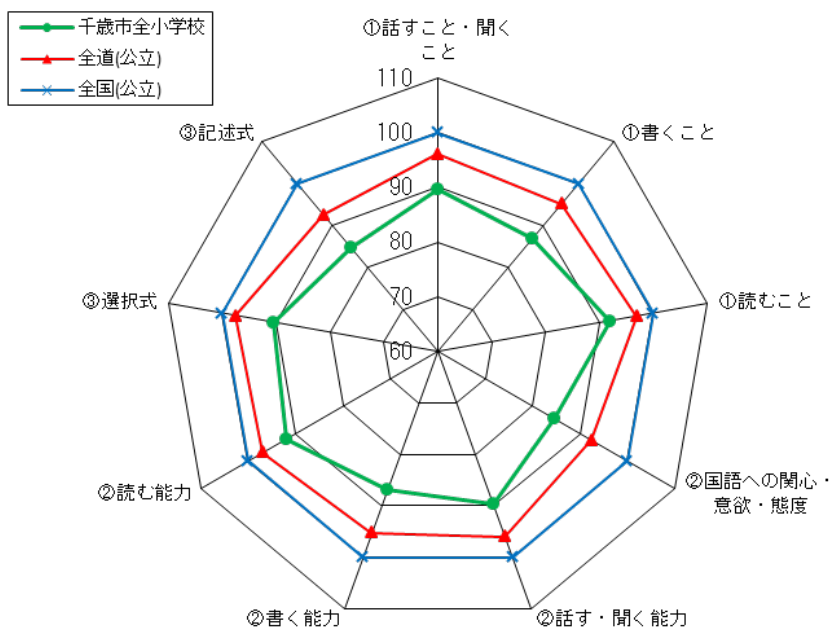


下位層の割合は、前年度と同様であるが、全国との差が広がっている。また、上位層の割合も全国より低い状況が見られる。

【正答数分布】

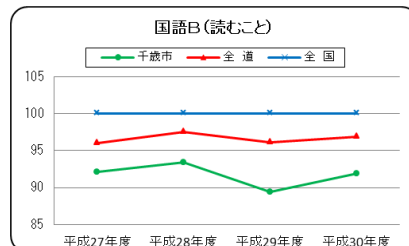
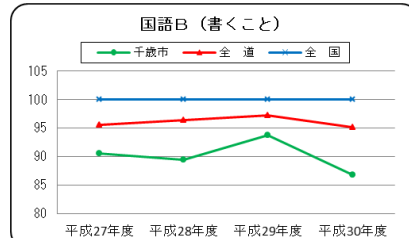
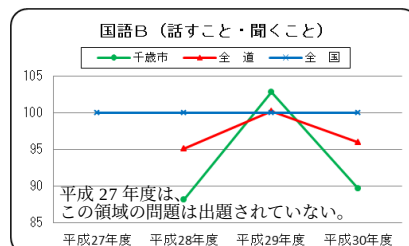


【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域の平均正答率が低下しており、活用力の育成に課題が見られる。

「話すこと・聞くこと」については、互いの立場や意図を明確にして話し合えることができるかどうかを見る問題が出題された。同様の問題は平成26年度にも出題されている。話し合いでは、聞き手、話し手、司会者それぞれの役割を理解し、話し合いを進めていくことが大切であり、国語の学習だけではなく学級会や朝の会、帰りの会などの場を利用し、話し方、聞き方、話し合いの進め方などを指導していく必要がある。「書くこと」「読むこと」については、国語Aと同様に全国との差が大きく、改善に向け、複数の資料や文章を関連付けて読む力や読む速さを高めていくことが必要である。「書くこと」については、全国との差が平成27年度以降最大となっており、「題材の設定→情報の収集→内容の検討→構成の検討→考えの形成→記述→推敲」という「書くこと」の一連のプロセスに沿って書くことができるようにする必要がある。また、授業の質を高めるだけではなく、指導時数を増やすなど、指導計画の見直しも必要である。

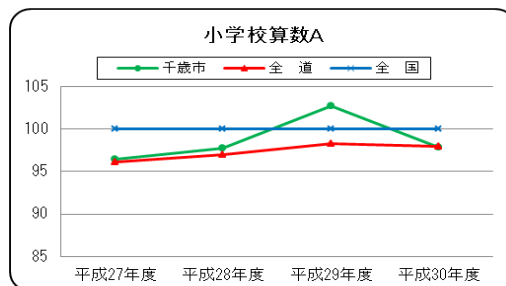


「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は、平成27年度以降出題されていないので経年変化グラフは掲載していません。

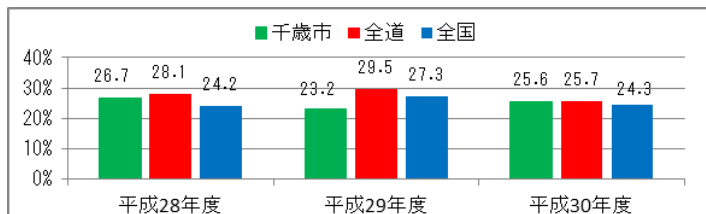
(5) 小学校算数A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	72.5 96.4	75.8 97.7	80.7 102.7	62.1 97.8
全 道	72.3 96.1	75.3 97.0	77.3 98.3	62.2 98.0
全 国	75.2 100	77.6 100	78.6 100	63.5 100

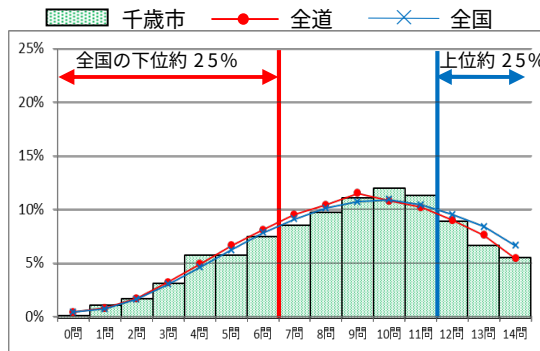


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】

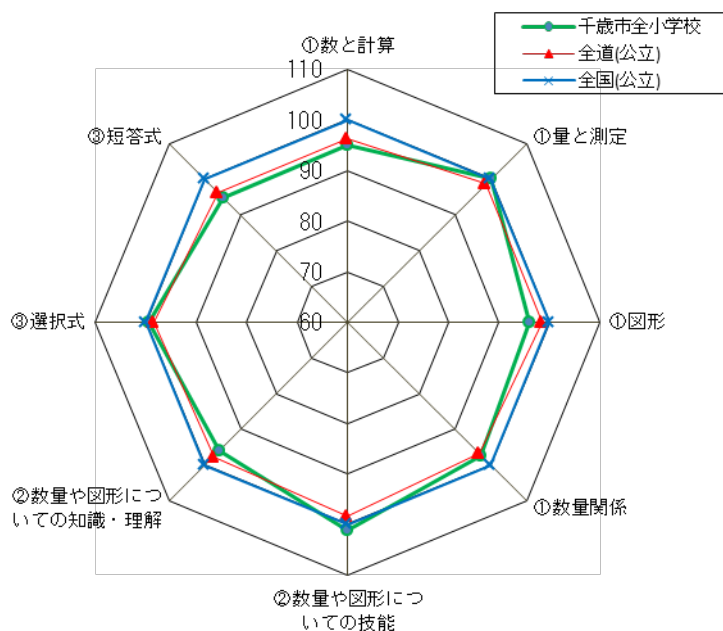


下位層の割合は、前年度より増加しているものの全国とほぼ同様となっている。上位層の割合は全国をやや下回っている。

【正 答 数 分 布】

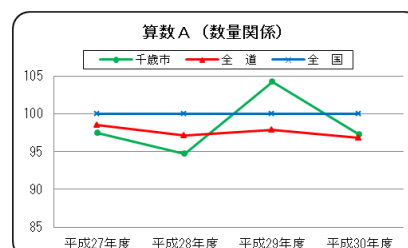
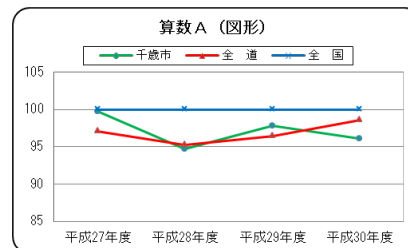
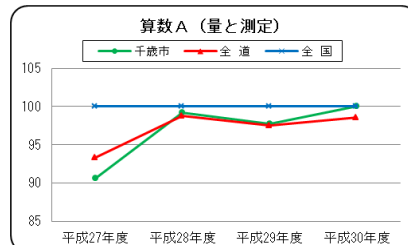
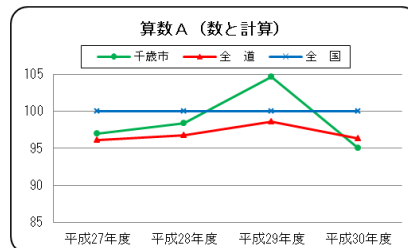


【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



問題の意味を理解し、計算の仕方を考える力を高める必要がある。

「数と計算」領域の平均正答率が、全国を大きく下回った要因として、計算問題を挙げることができる。千歳市の児童の計算力は高く、領域全体の平均正答率を押し上げていたが、計算問題が出題されなかったことにより、平均正答率が低下したと考えられる。数と計算領域においては、「問題の意味を理解し(演算を決定する)、計算の仕方を考え、計算ができる」ことが求められており、計算力を高めることを継続しながら、数直線などを用いて何算で解決できるかを判断したり、計算の仕方を考えたりする力を高めていく必要がある。「図形」領域は、3問出題され、2問は全国平均と同様であったが、空間の中にあるものの位置を数値で表す問題の正答率が全国平均を 5.6 ポイント下回った。平面や空間の位置を数で表すことは、中学校の座標の学習につながることから、確実に身に付けさせる必要がある。

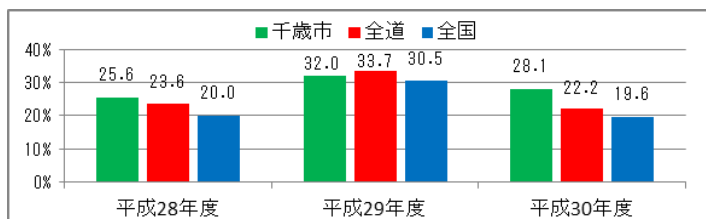


(6) 小学校算数B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

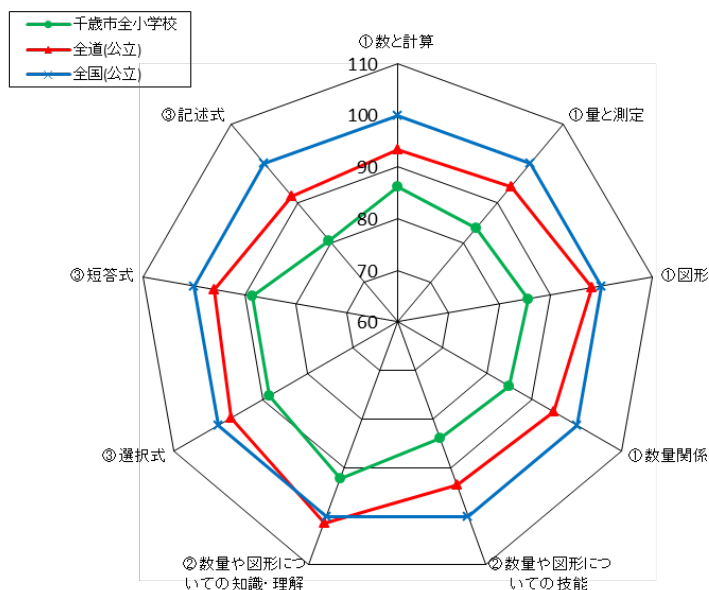
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	41.8 92.9	42.4 89.8	43.6 95.0	44.0 85.4
全 道	42.5 94.4	44.5 94.3	43.5 94.8	48.7 94.6
全 国	45.0 100	47.2 100	45.9 100	51.5 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】



下位層の割合の全国との差は広がり、上位層の割合が相当低い状況が見られる。

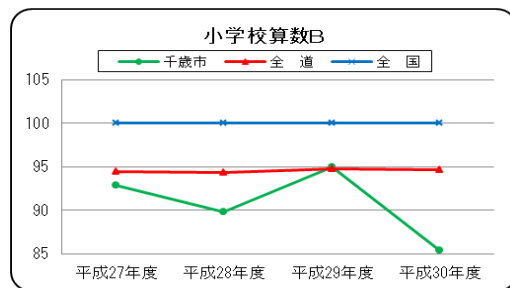
【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



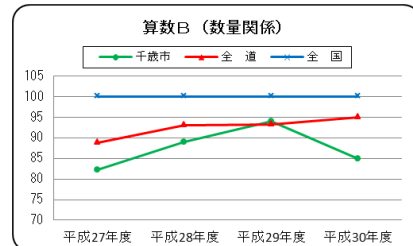
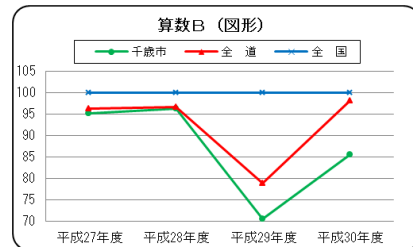
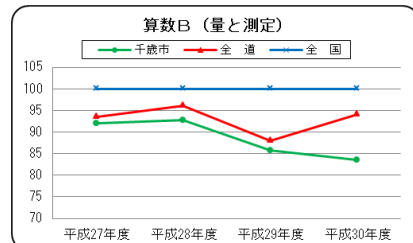
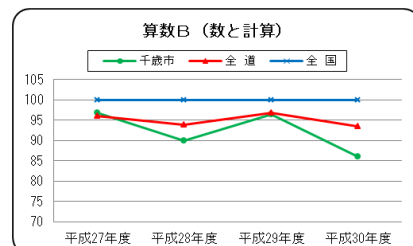
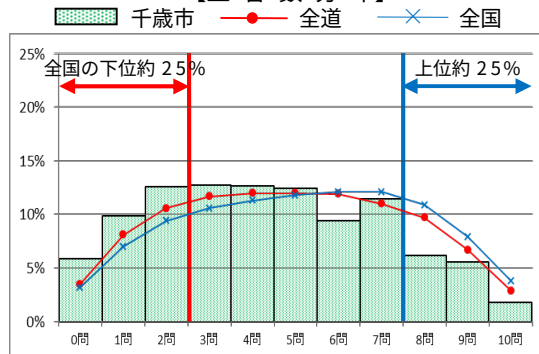
「事実」「方法」「理由」を記述することに課題が見られる。

10 問中、記述式問題は 5 問出題されたが、この 5 問の千歳市の平均正答率は全国を 100 としたときの指数で 80.6 と低く、表やグラフなどから見いだせる傾向や特徴を記述すること(事実の記述)、問題の解決方法を記述すること(方法の記述)、判断や考えの正しさを記述すること(理由の記述)すべてに課題が見られる。

記述力を高める工夫として、①一部を空欄にした説明文を示し、空欄に適切な言葉や数を記入させる。②使用する言葉や数、式を示し、記述させる。③記述例を示し、例を参考に記述させる。④説明文を途中まで示し、続きを記述させる。⑤ヒントを示さず記述させる。という 5 つの例が調査問題という形で示されており、これらを参考に数学的に表現する力を高めていく必要がある。



【正 答 数 分 布】

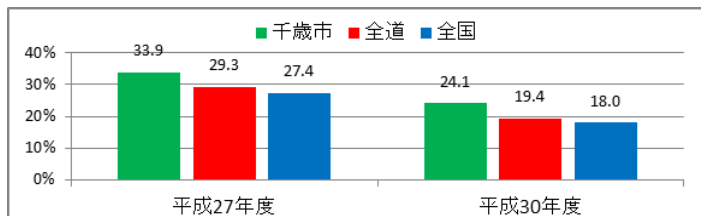


(7) 小学校理科

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

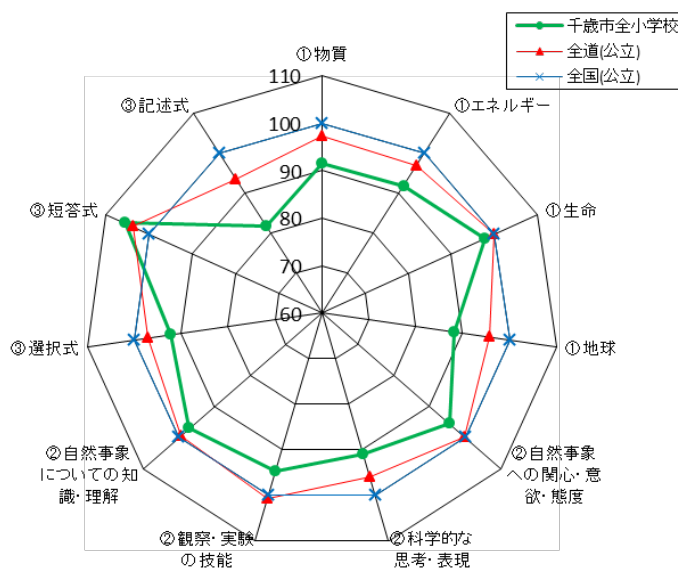
	平成27年度	平成30年度
千歳市	57.5 94.6	55.6 92.2
全道	59.3 97.5	58.8 97.5
全国	60.8 100	60.3 100

【全国の下位25%と同じ正答率の範囲に含まれる児童の割合】



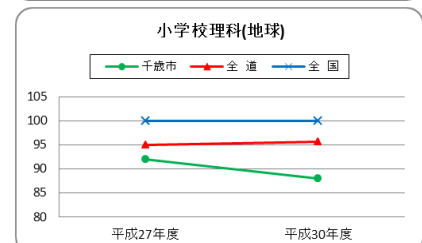
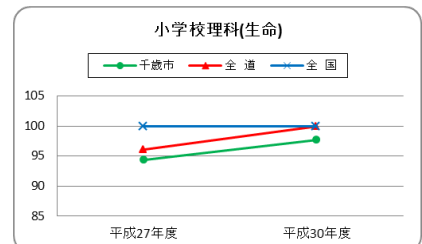
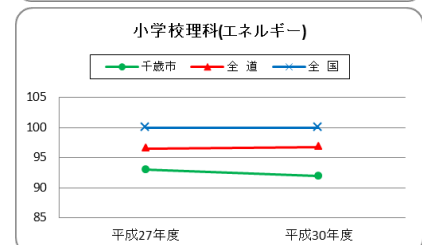
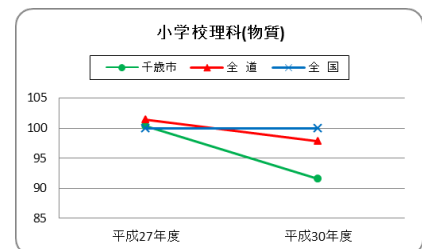
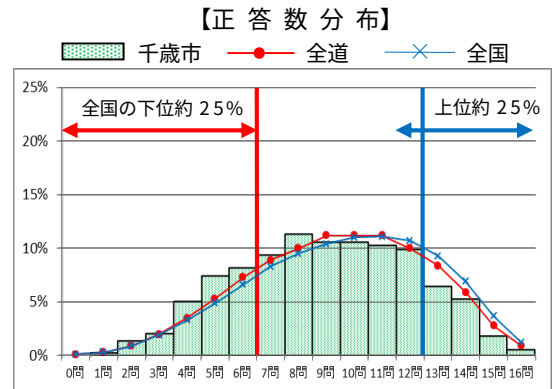
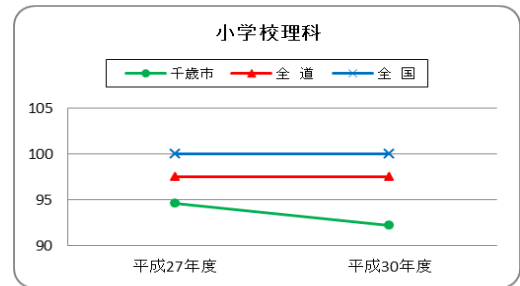
下位層の割合の全国との差は、平成27年度調査よりわずかに縮まったが依然として6ポイントほどの差がある。また、上位層の割合が低い状況が見られる。

【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



4領域中3領域で全国との差が広がっており、科学的な思考に課題が見られる。

「生命」の領域については、全国との差が縮まったが、「物質」「エネルギー」「地球」の領域については、全国との差が広がった。土地の浸食や電流の流れ方について、予想される結果を見通して実験を構想する問題や物を水に溶かしても全体の重さは変わらないことに関する問題の正答率が全国を7ポイント以上下回っており、科学的な思考に課題が見られる。また、ろ過の適切な操作に関する問題の正答率が全国平均を9.2ポイント下回った。実験器具の操作は、観察、実験で実際に使用することを通して身に付くものであり、観察、実験の時間を確実に確保し、児童が問題に対して根拠のある予想や仮説を構想し、それらを確かめるために発想した解決の方法で観察、実験を行うことの重要性を意識して授業改善に取り組む必要がある。

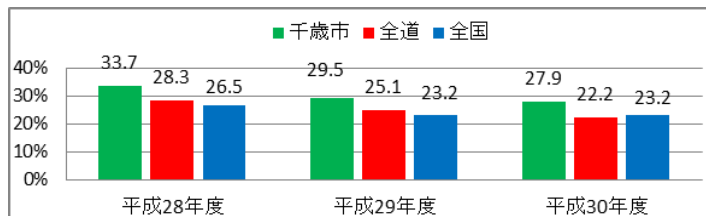


(8) 中学校国語 A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

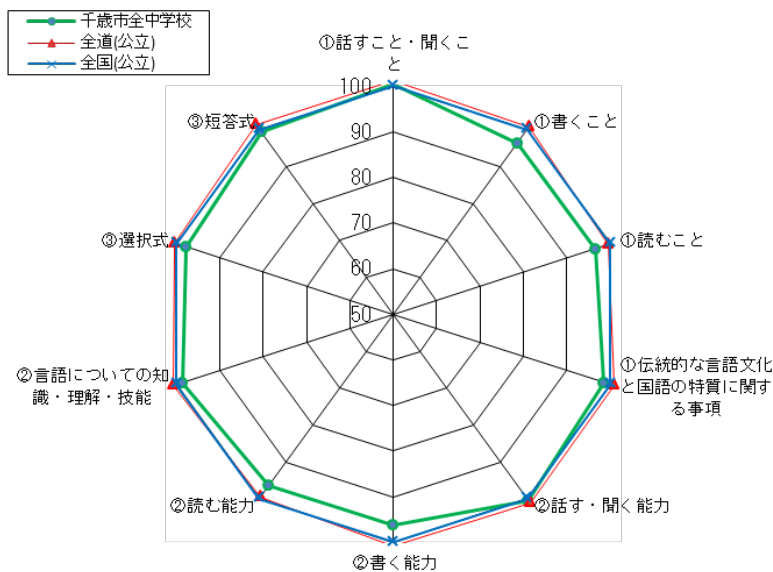
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	74.9 98.8	72.8 96.3	74.6 96.4	74.7 98.2
全 道	75.8 100	75.1 99.3	76.7 99.1	76.6 100.7
全 国	75.8 100	75.6 100	77.4 100	76.1 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】



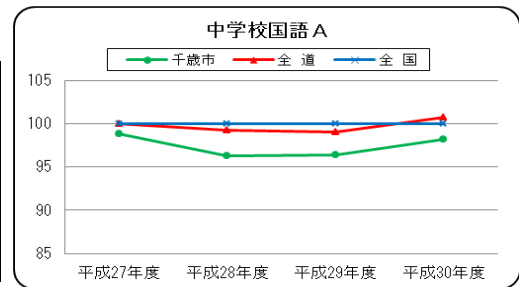
下位層の割合の全国との差は、3 年連続縮まっており全国の割合に近づいてきている。上位層の割合については、全国より低い状況が見られる。

【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】

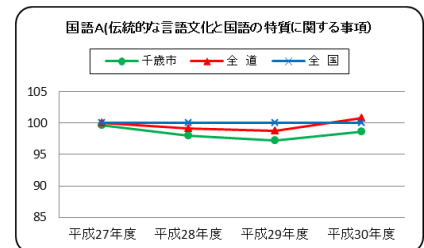
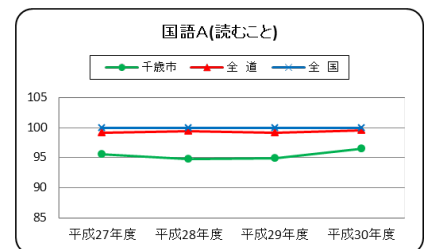
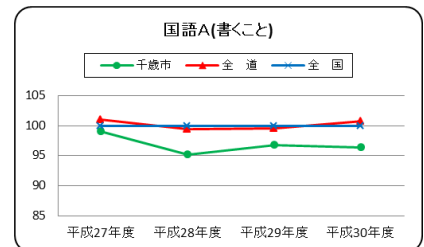
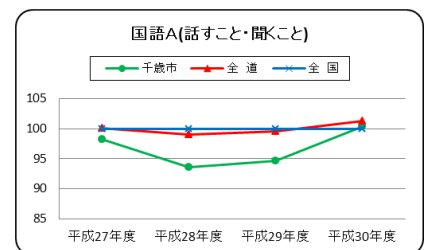
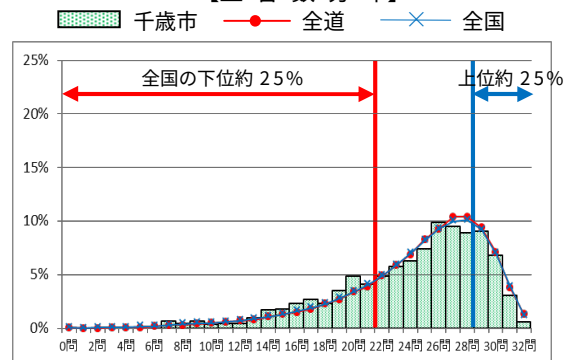


「話すこと・聞くこと」は、全国を上回り、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は、全国との差が縮まった。

「話すこと・聞くこと」は、3 年連続前年度を上回り、全国と同様となった。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は改善が見られ、全国との平均正答率の差は、-1.1 ポイントまで縮まった。「読むこと」についても、全国との差が縮まったが、平成 27 年度以降の変動幅は小さく、今後も「文学的な文章」よりも「説明的な文章」の正答率が低い傾向が見られることに留意し、改善に向けた取組を進める必要がある。「書くこと」については、平成 28 年度以降横ばい状態が続いており、課題が見られる。本年度は、「書くこと」の指導事項の中から「構成」「記述」「推敲」に関する問題が出題されたが、特に、「推敲」に関する問題の正答率が低く、全国との差は 5 ポイント以上であったことから、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にする力を高めていく必要がある。



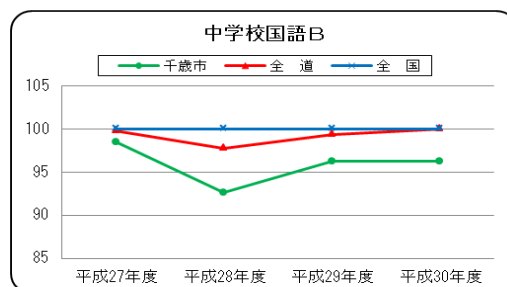
【正 答 数 分 布】



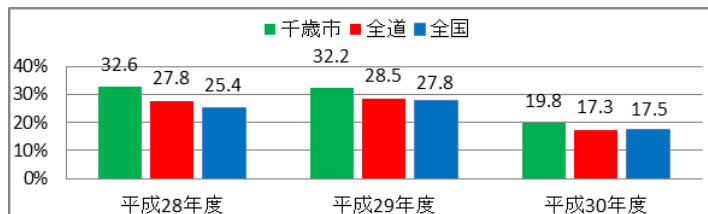
(9) 中学校国語B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	64.8 98.5	61.6 92.6	69.5 96.3	58.9 96.2
全 道	65.7 99.8	65.0 97.7	71.7 99.3	61.2 100
全 国	65.8 100	66.5 100	72.2 100	61.2 100

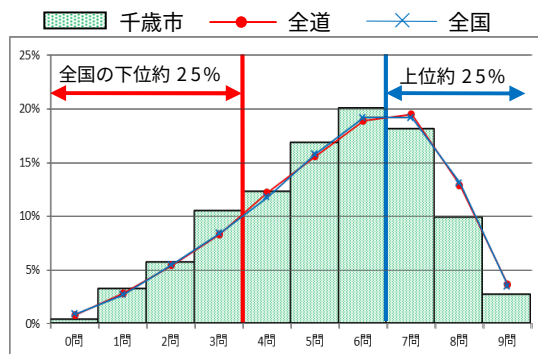


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

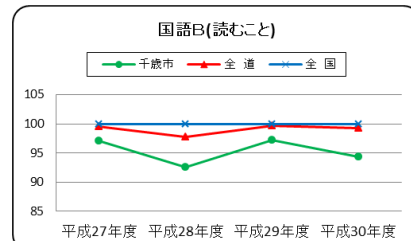
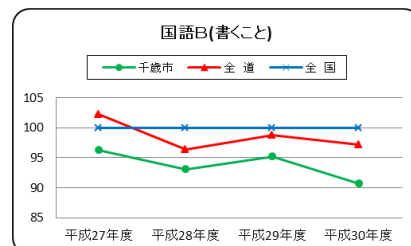
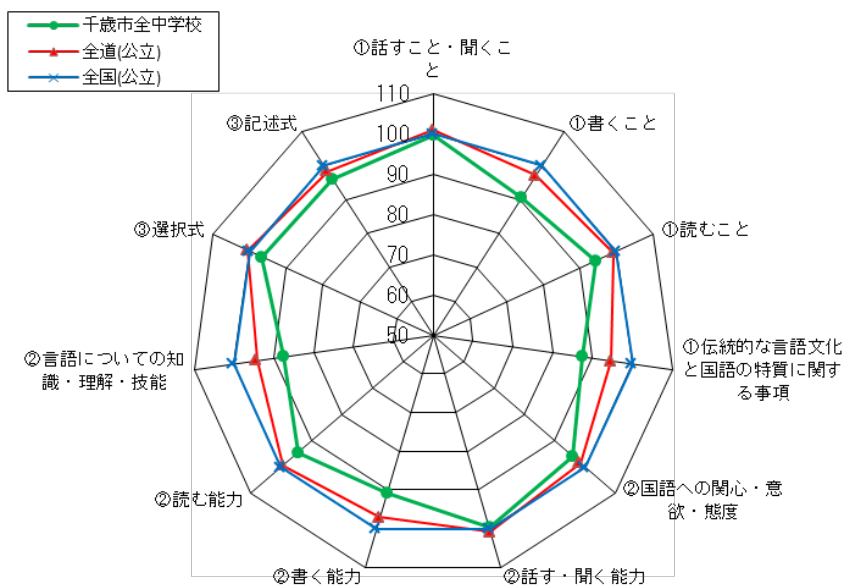


国語 A と同様に、下位層の割合の全国との差は、3 年連続縮まっている。上位層の割合については、全国を下回っている。

【正 答 数 分 布】



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「話すこと・聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域の問題は、平成 27 年度、平成 28 年度の 2 カ年間出題されていないため、経年変化グラフは掲載していません。

「話すこと・聞くこと」は全国と同様であったが、「書くこと」「読むこと」は、全国との差が広がった。

本年度は「話すこと・聞くこと」の正答率は、全国を 100 とした指数で 99.7 であり全国と同様であった。「書くこと」は、前年度を大きく下回り、全国との差は平成 27 年度以降最も大きくなった。「読むこと」についても全国との差が広がっており、国語 A と同様の結果となっている。

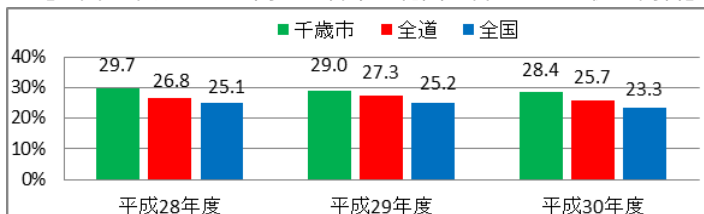
国語 B 問題は、「読むこと」の問題の中に「書くこと」の設問や「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の設問が含まれているというように、一つの領域だけではなく、複数の領域の指導事項に対応させて作成されている。また、一つに限定される正答を書くのではなく、いくつかの選択肢やいろいろな考え方、答え方があるものなどについて、自分の考えを明確にして書くことを求めている。このため、「文章の中心的部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすることができる」ことや「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くことができる」ことを重点に指導に当たる必要がある。

(10) 中学校数学A (主として「知識」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

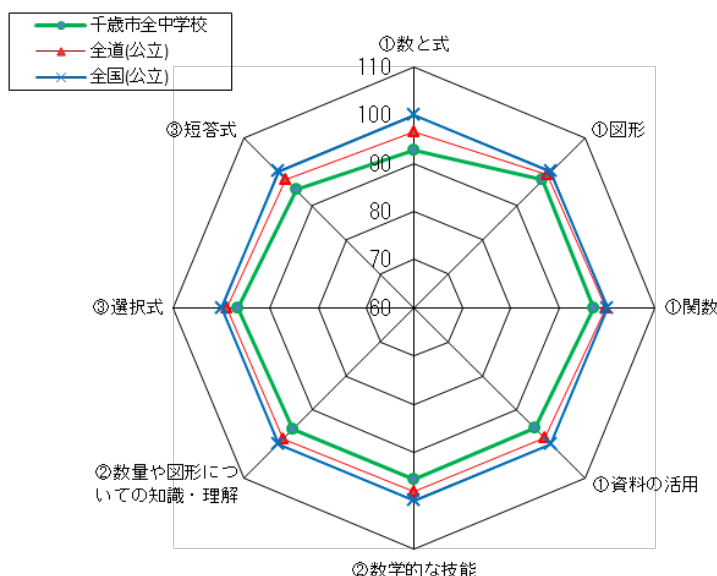
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	60.9 94.6	59.3 95.3	61.4 95.0	63.3 95.8
全 道	63.0 97.8	61.8 99.4	63.7 98.6	64.9 98.2
全 国	64.4 100	62.2 100	64.6 100	66.1 100

【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】



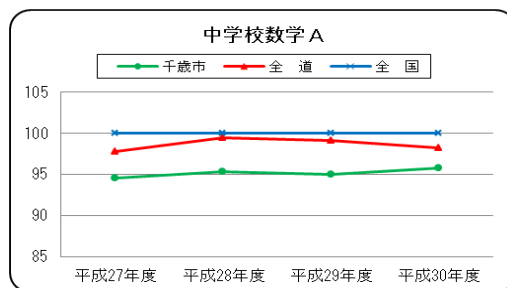
下位層の割合は、3 年連続減少しているが、全国との差は縮まっておらず、本年度の下位層の割合の全国との差は、5.1 ポイントと前年度より広がった。

【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】

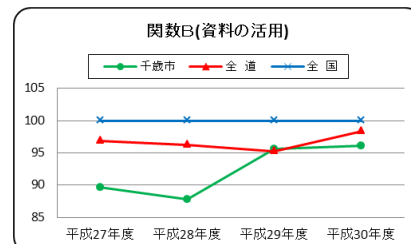
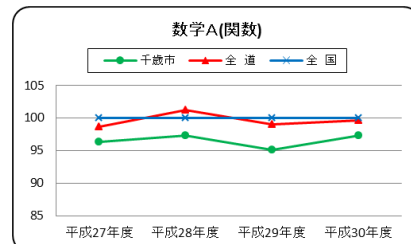
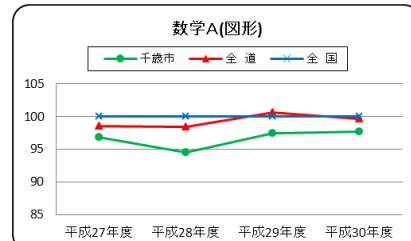
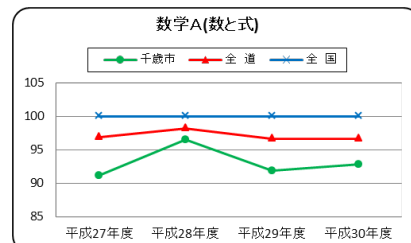
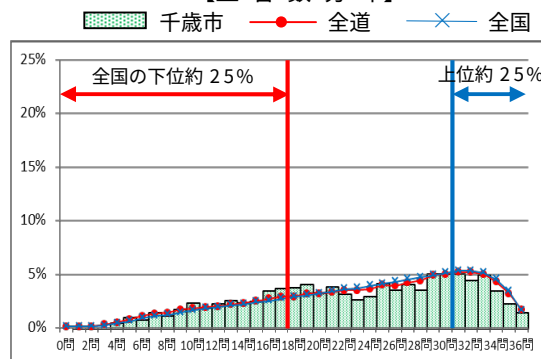


すべての領域で全国との差が縮まったが、上昇幅は小さく、前年度の正答率を維持した状況となっている。

「数と式」については、全国との差が大きく、正負の数の四則計算、文字を用いた式の計算、比例式や方程式を解くこと、大小関係を不等式で表すことなど、基本的な知識・技能の定着を図る必要がある。「図形」は、全国と同様であるが、底面積と高さが等しい錐体と柱体の体積の関係については、正答率が 49.8%と低く、底面積と高さが等しい錐体と柱体の容器に砂などを入れて体積を図る数学的な活動を通して柱体の体積は錐体の体積の 3 倍になることを理解させる必要がある。「関数」は全国とほぼ同様であるが、一次関数や反比例の式とグラフ、表を相互に関連付けて理解できるようにする必要がある。「資料の活用」については、最頻値の意味として正しいものを選ぶ問題や中央値を求める問題の正答率が低く、資料の傾向を読み取る際に用いる「最頻値」「中央値」「範囲」「相対度数」などの用語の意味を理解させ、それらを用いて事象を考察できる力を高めていく必要がある。



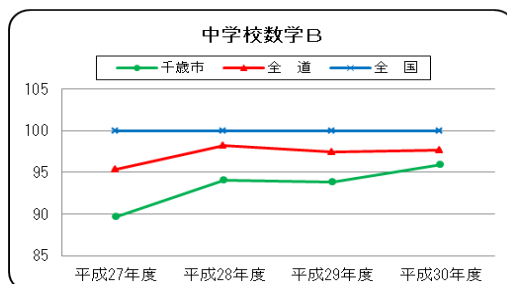
【正 答 数 分 布】



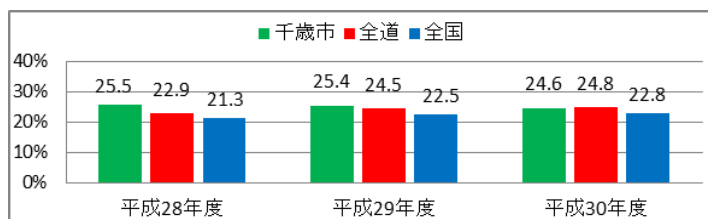
(11) 中学校数学B (主として「活用」に関する問題)

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度
千 歳 市	37.3 89.7	41.5 94.1	45.1 93.8	45.0 95.9
全 道	39.7 95.4	43.3 98.2	46.9 97.5	45.8 97.7
全 国	41.6 100	44.1 100	48.1 100	46.9 100

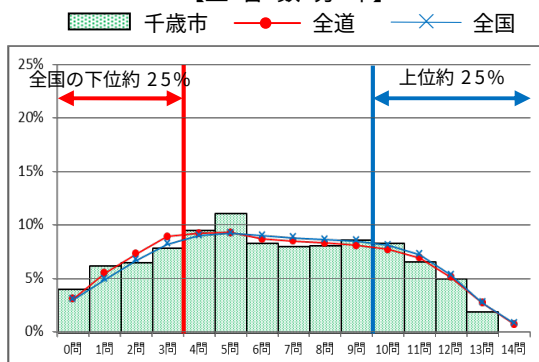


【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】

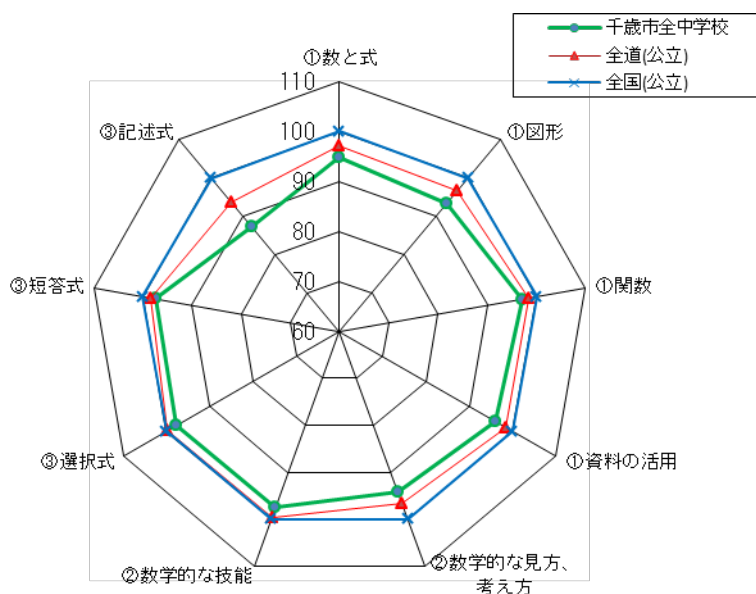


下位層の割合は、全国との差が縮まってきているが、上位層の割合が全国をやや下回っている。

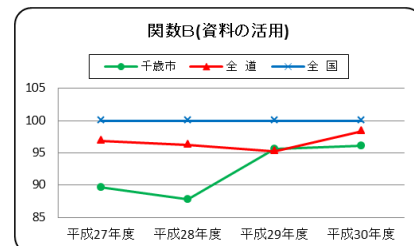
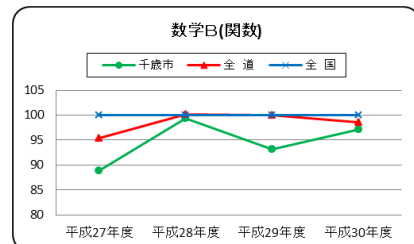
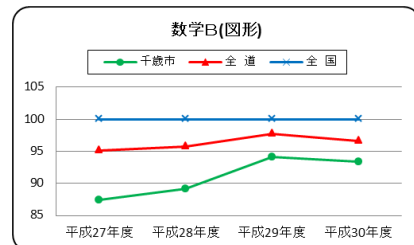
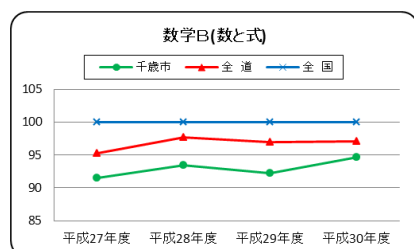
【正 答 数 分 布】



【区分別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「数と式」「関数」「資料の活用」の3領域の正答率が向上した。



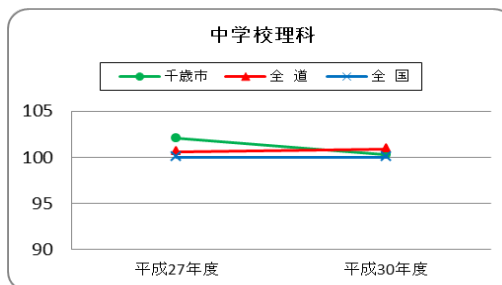
「数と式」については、前年度を上回り全国との差が縮まった。「図形」については、証明を完成させる問題の正答率が3年連続全国と同様となっている。「関数」については、前年度を上回り全国との差が縮まった。「資料の活用」については、確率の問題の正答率が高かったが、領域全体の正答率は前年度と変わりなかった。「記述式問題」は、5問出題されたが全国平均正答率を100としたときの指数が87.5と依然として低く、改善が図られていない状況が見られる。

引き続き、数式を根拠に事柄が成り立つ理由を説明する学習活動や資料の傾向を的確に捉えて判断し、その理由を数学的な表現を用いて説明する学習活動を工夫し、論理的に考える力や数学的に表現する力を高めていくことが必要である。

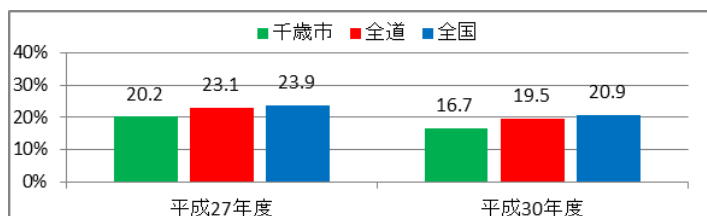
(12) 中学校理科

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を 100 とした指数

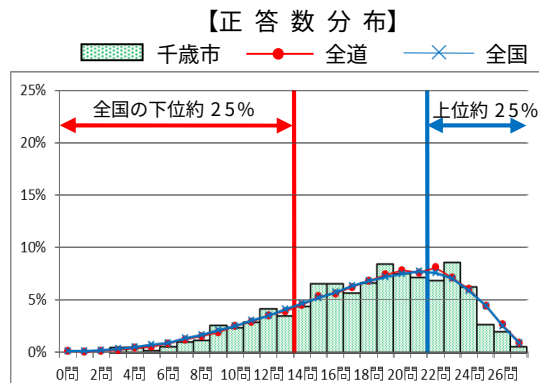
	平成 27 年度	平成 30 年度
千 歳 市	54.1 102.1	66.3 100.6
全 道	53.3 100.6	66.7 100.9
全 国	53.0 100	66.1 100



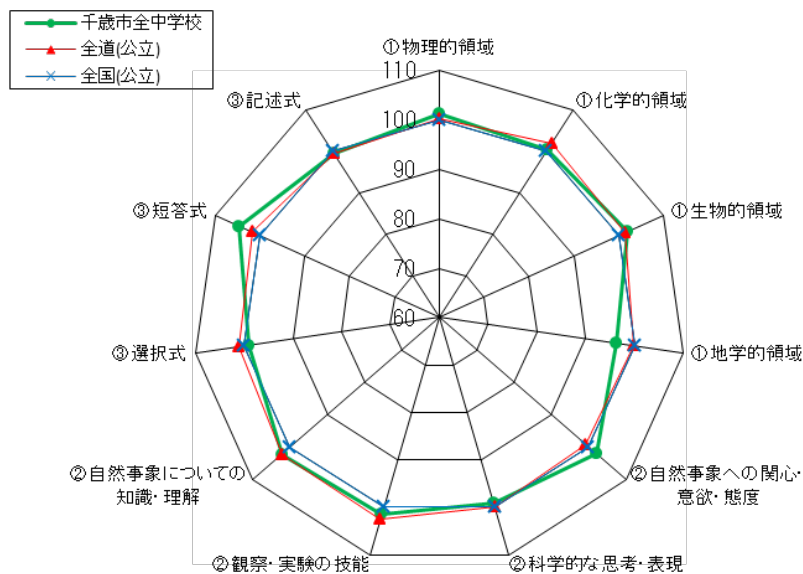
【全国の下位 25%と同じ正答率の範囲に含まれる生徒の割合】



平成 27 年度の調査と同様に、下位層の割合が全国より低い。今回の調査では、中位層の割合に対して上位層の割合が低い状況が見られる。

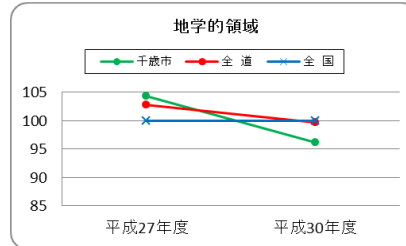
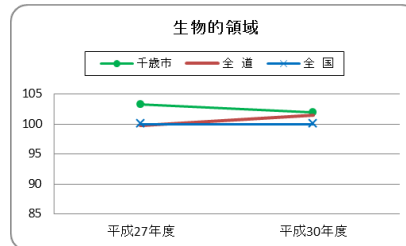
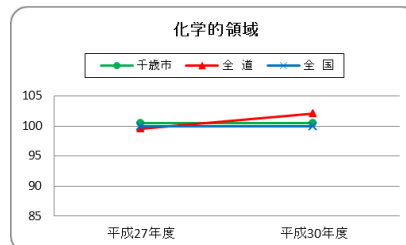
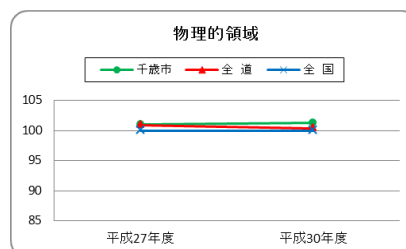


【区別集計結果と領域別正答率の経年変化】



「物理的領域」「科学的領域」「生物的領域」は全国を上回り、「地学的領域」は全国を下回ったが、理科全体は全国水準の学力が維持されている。

「物理的領域」の正答率は全国を 100 とした指数で 101.2、「科学的領域」は 100.5、「生物的領域」は 101.9 であり全国を上回ったが、「地学的領域」は 96.2 で全国を下回った。正答率が低かった問題は「食塩水の質量パーセント濃度が 3.0%のものを選ぶ問題(技能)」「台風の進路のシミュレーション結果から、台風の進路に関係している条件を選ぶ問題(活用)」「地震の S 波による揺れは初期微動か主要動のどちらかを答える問題(知識)」の 3 問だけである。理科全体の結果は平成 27 年度に引き続き全国水準の学力が維持されており、今後も、観察・実験の結果を整理し考察する学習活動や科学的な概念を使って考えたり説明したりする学習活動を重視し、授業改善に取り組んでいくことが大切である。

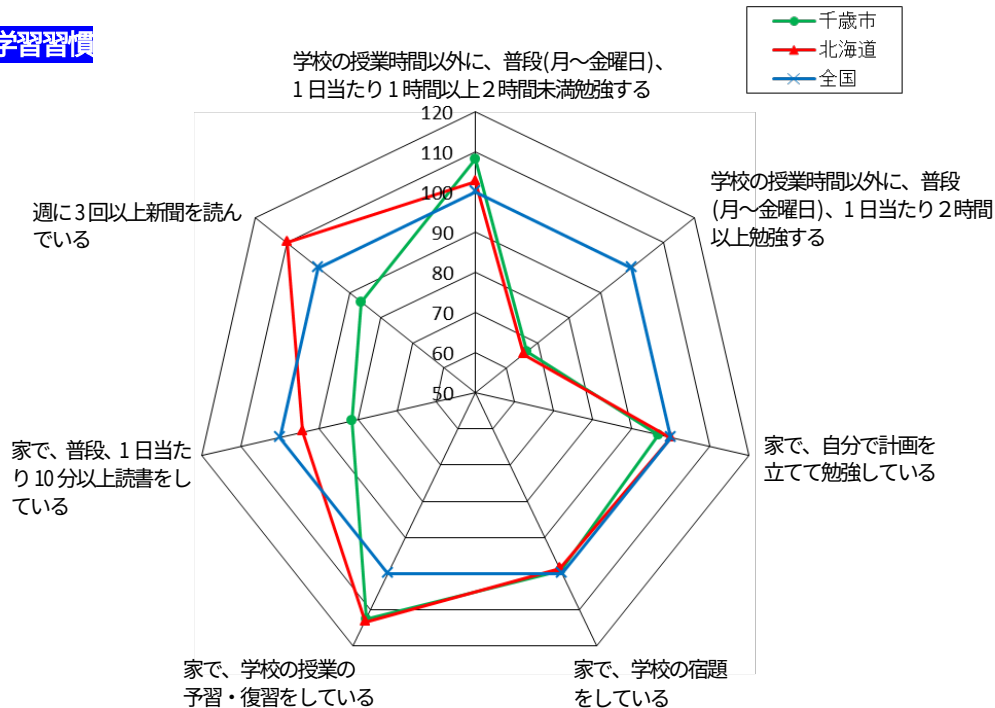


3 児童生徒質問紙の結果

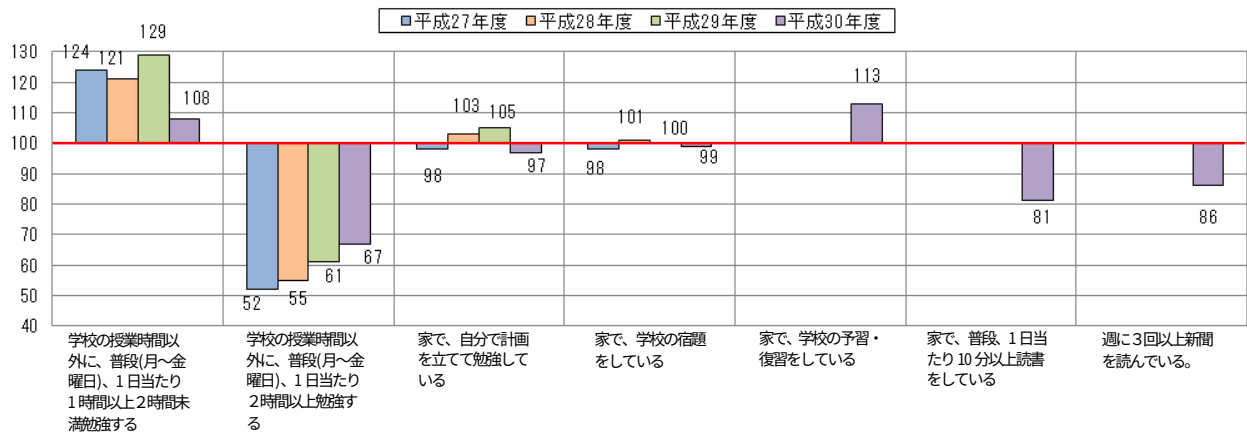
平成30年度の調査では、児童質問紙の質問項目が大幅に変更された。生活習慣に関する質問については、千歳市の課題である「テレビの視聴時間」「ゲームの時間」「スマートフォン等利用しての通話時間」の質問が削除され、「朝食の摂取」「就寝時刻」「起床時刻」の3つの質問となった。これら3つの質問項目については、千歳市の児童生徒はすでに全国と同様の状況にあることから、これまで、取り上げてきた「生活習慣」については、報告書から削除する。また、学習習慣に関する調査については、「休日の学習時間」「通塾の状況」の2つの質問が削除されたことから、この2つの質問項目に替えて、新たに「読書の時間」と「新聞を読む回数」を取り上げることとした。

さらに、「国語に関する関心・意欲・態度」に関する質問がすべて削除されたことから、本年度の「教科に関する関心・意欲・態度」については、「算数・数学科」と「理科」の2教科とする。

(1) 小学校学習習慣



過去4年間の千歳市の経年変化 (グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す)

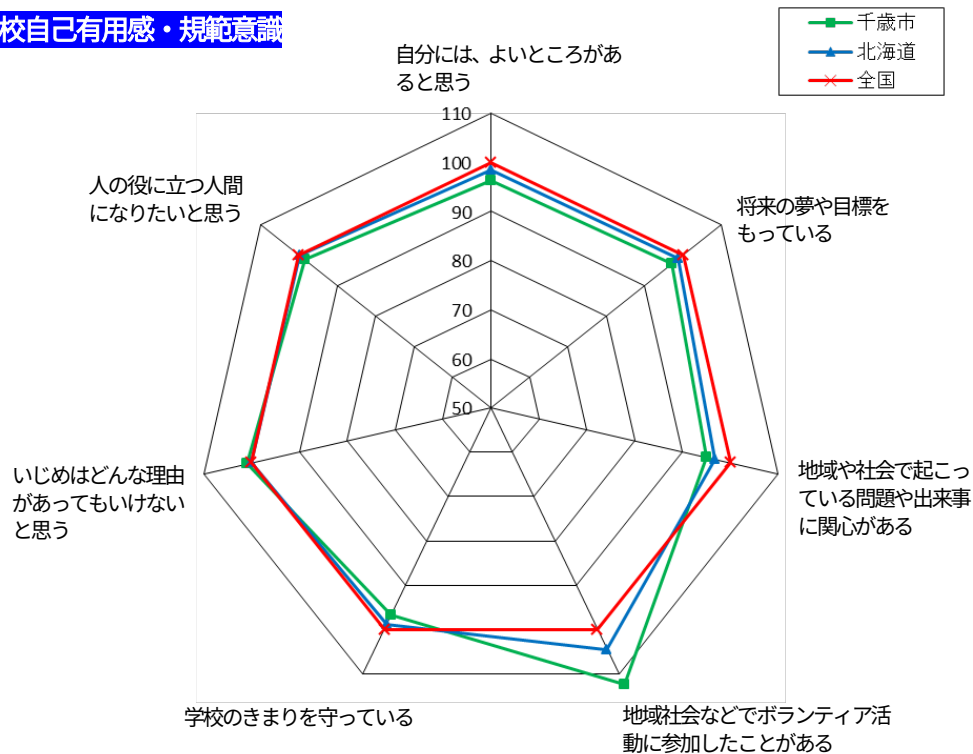


普段の学習時間や読書の時間が全国に比べて少ない状況が見られる。

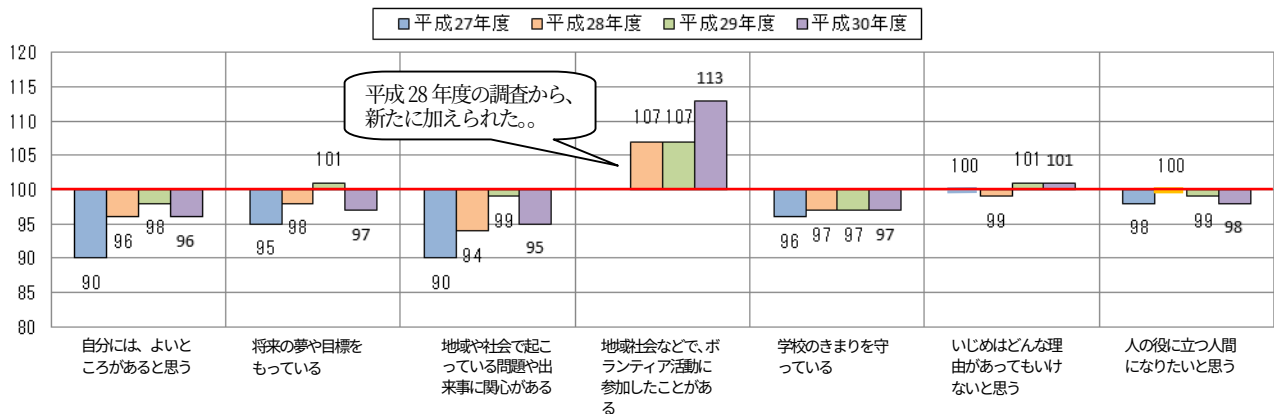
本年度の調査においても、「普段、1時間以上2時間未満勉強する」児童が全国を上回っており、各学校が取り組んできた「学年×10分+10分の家庭学習の取組」が定着している状況が見られる。1週間の総学習時間を増やすことが千歳市の課題であることから、今後も「学年×10分+10分の家庭学習」に取り組む児童を増やすとともに、休日の学習時間を確保する取組を全市的に展開していくことが大切である。

本年度から取り上げた「読書」については、「家で10分以上読書をする」児童の割合は、全国を大きく下回っている。読書と学力の関係については、文部科学省の委託研究調査により「すべての時間を勉強に費やすより、いくらかの時間を読書に割いた方が教科の学力が高い」ことが確認されている。このため、今後、家庭での読書時間や勉強時間の変化と教科に関する調査結果の関係を捉えていくこととする。

(2) 小学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



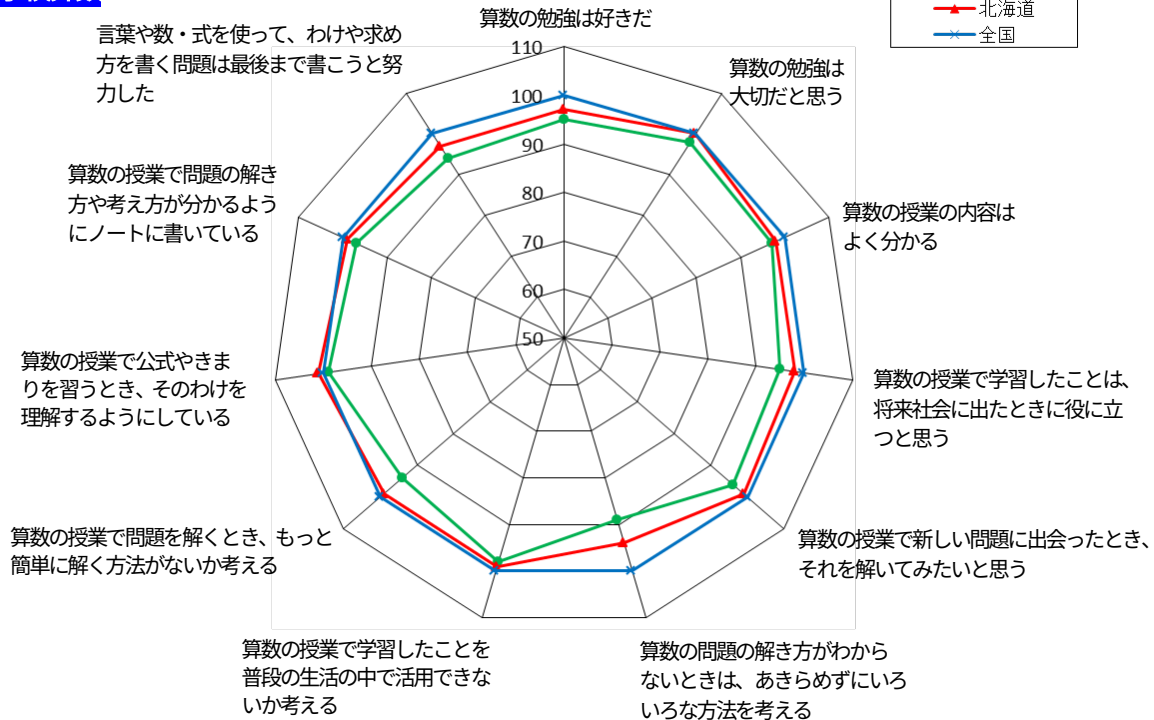
地域社会などで、ボランティア活動に参加した児童が全国を大幅に上回っており、行動で地域と関わろうとする児童が増加している。

規範意識については、「学校のきまりを守っている」児童の割合が4年間全国と同様の状況が続いている。自己有用感については、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持っている」と回答した児童の割合は、ともに前年度を下回ったが、全国とほぼ同様となっている。「地域との関わり」については、「地域や社会で起きている問題や出来事に関心がある」児童の割合が前年度を下回ったが、「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」児童の割合が、全国を大きく上回っており、行動で地域と関わろうとする児童が増加している状況が見られる。ボランティア活動で地域の人たちから「褒められる」「認められる」という経験が児童の自己有用感や規範意識などの高揚に大きな影響を与えていると考えられる。

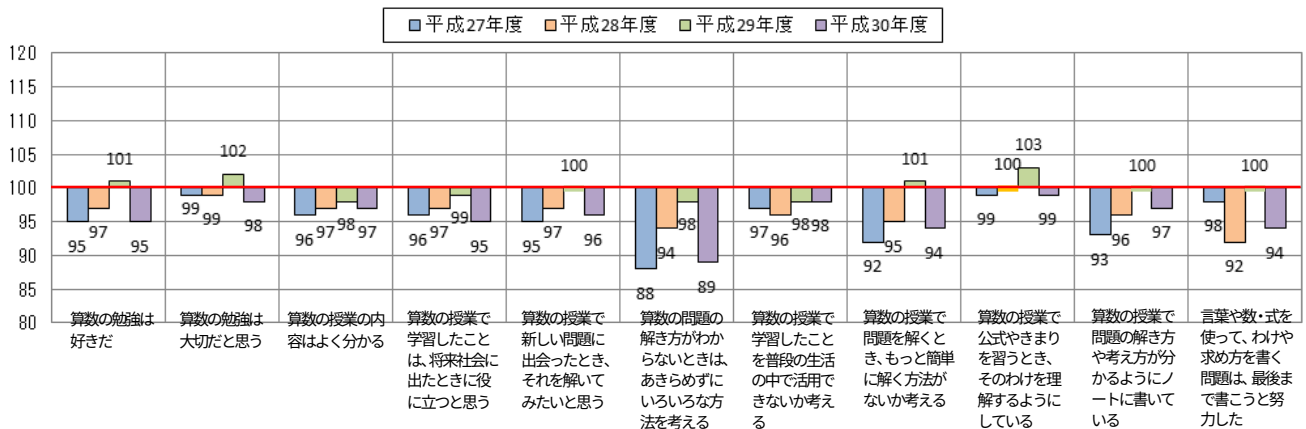
「他者理解」については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」と回答した児童は、2年連続全国を上回り、「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した児童の割合も全国と同様となっており、各学校が取り組んできた児童による「いじめ根絶」の取組の成果が見られる。

今後もハイパーQJ検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、自己有用感や規範意識を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てていく取組を展開していくことが大切である。

(3) 小学校算数



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



算数好きの児童が減少しており、算数に対する関心・意欲・態度の低下が見られる。

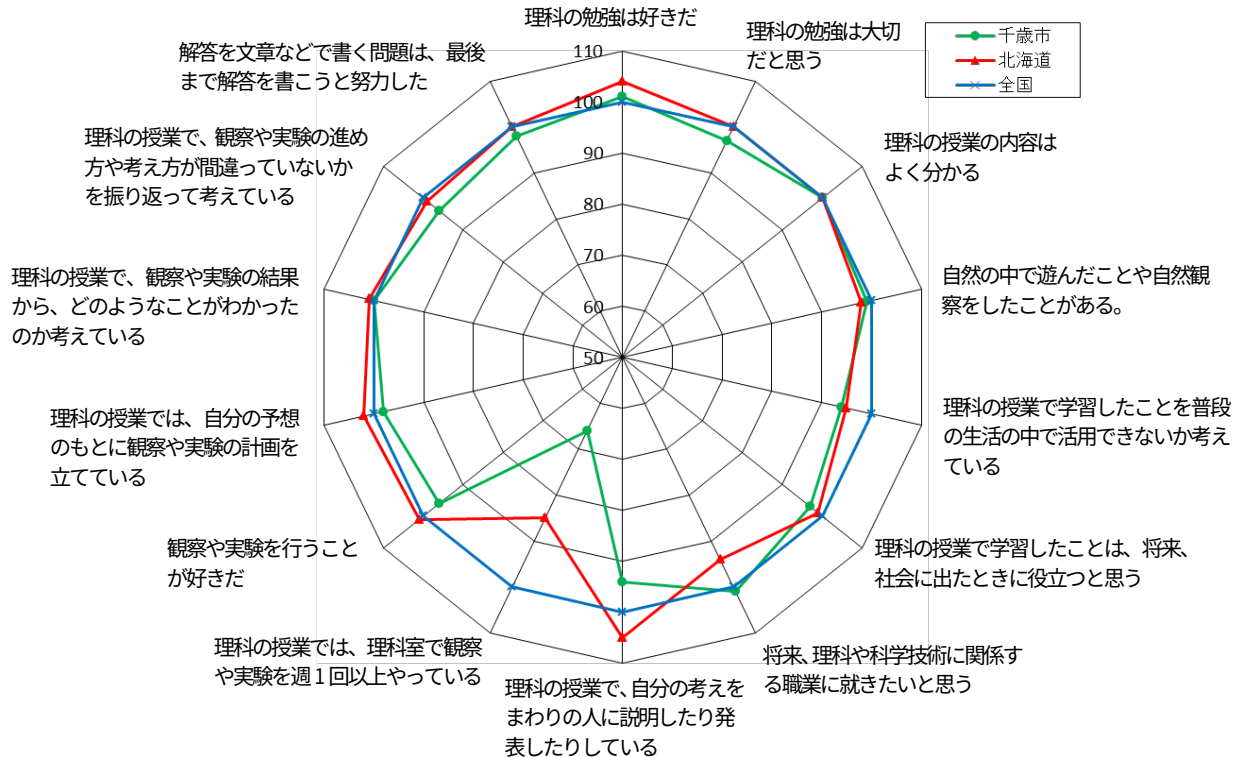
算数に対する関心・意欲・態度に関しては、「算数が好き」と回答した児童の割合は前年度を下回ったが、「授業の内容がよく分かる」と回答した児童の割合は、4年連続変化が見られず、算数は好きではないが授業内容は理解できている児童が増えている状況が見られる。

また、「算数の勉強は大切だと思う」「算数の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童は、前年度を下回っており、算数の有用性をあまり感じていない児童が増えている。

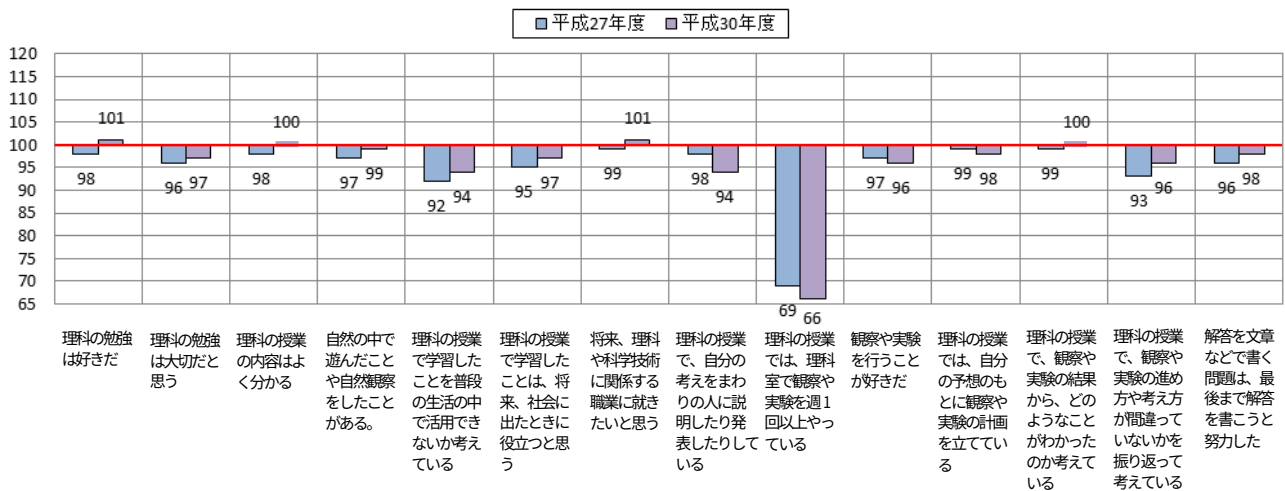
算数の学び方については、「公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」「問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」児童の割合は全国と同様となっており、算数B問題に対応できる力の育成をめざす授業が各学校で展開されていることが窺えるが、「言葉や数・式を使って、わけや求め方を書く問題は、最後まで書こうと努力した」児童の割合は、前年度を大きく下回っており、あきらめずに記述式問題に取り組もうとする意欲や態度に課題が見られる。

今後、学習支援員を活用した習熟度別少人数指導のよさを生かし、問題を解決するための自分の考え方や解決方法を記述させたり、ある事柄な成り立つ理由を記述させたりするなど、千歳市の児童が苦手としている「書く活動」を積極的に取り入れた授業を工夫し、最後まであきらめずに取り組もうとする意欲や態度を育てていく必要がある。

(4) 小学校理科



平成27年度調査との比較(グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す。)



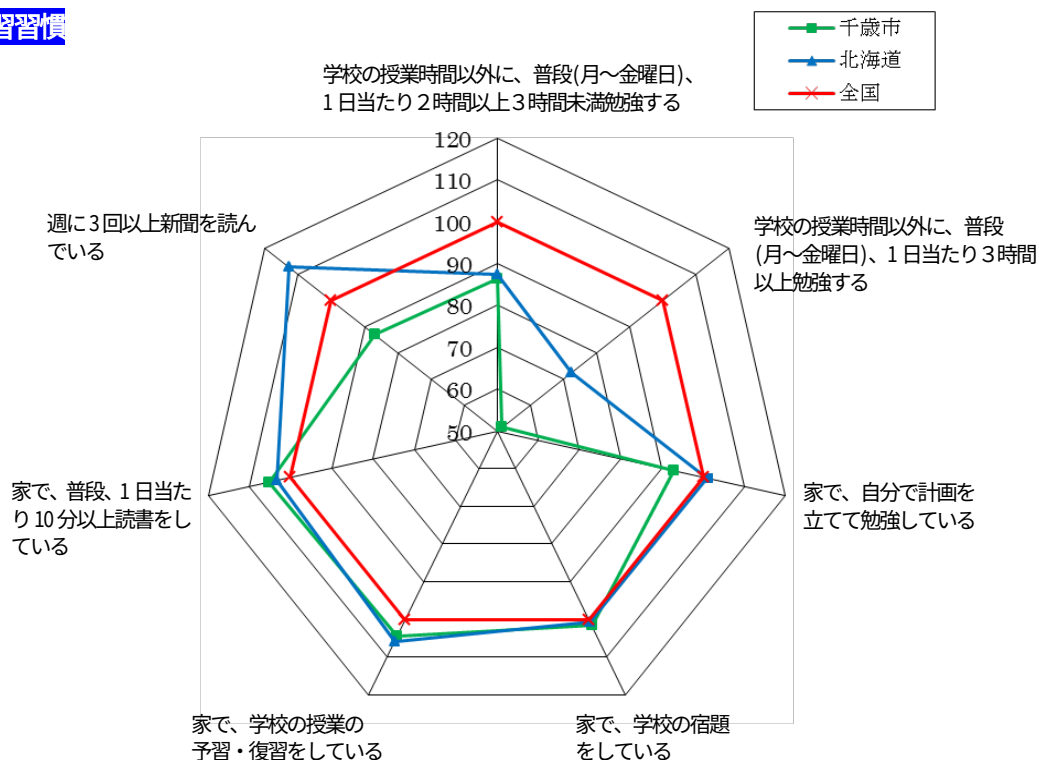
理科の授業が好きで、授業内容がよく分かる児童が増えているが、理科の授業で理科室で観察や実験をあまりやっていないと感じている児童が多い。

「理科の勉強が好き」「理科の授業の内容はよく分かる」と回答した児童の割合や、「理科の勉強は大切だ」「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した児童の割合は、全国とほぼ同様で理科に対する関心・意欲・態度は高い状況が見られる。

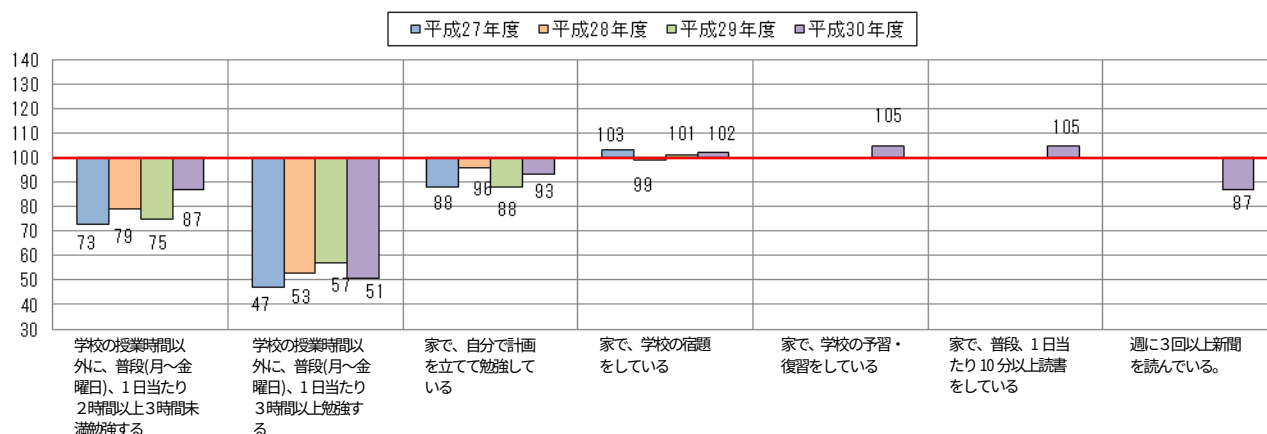
一方、「理科の授業では、理科室で観察や実験を週1回以上やっている」と回答した児童の割合は、全国を大きく下回り、理科の授業で観察や実験をあまりやっていないと感じている児童が平成27年度の調査とほぼ同じ割合となっている。

学び方については、自分の考えをまわりの人たちに説明したり、発表したりしていると回答した児童の割合が前回調査を下回っており、科学的な見方・考え方をはぐくむためにも「観察・実験」や「対話的な学習」を重視した授業を展開していく必要がある。

(5) 中学校学習習慣



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）

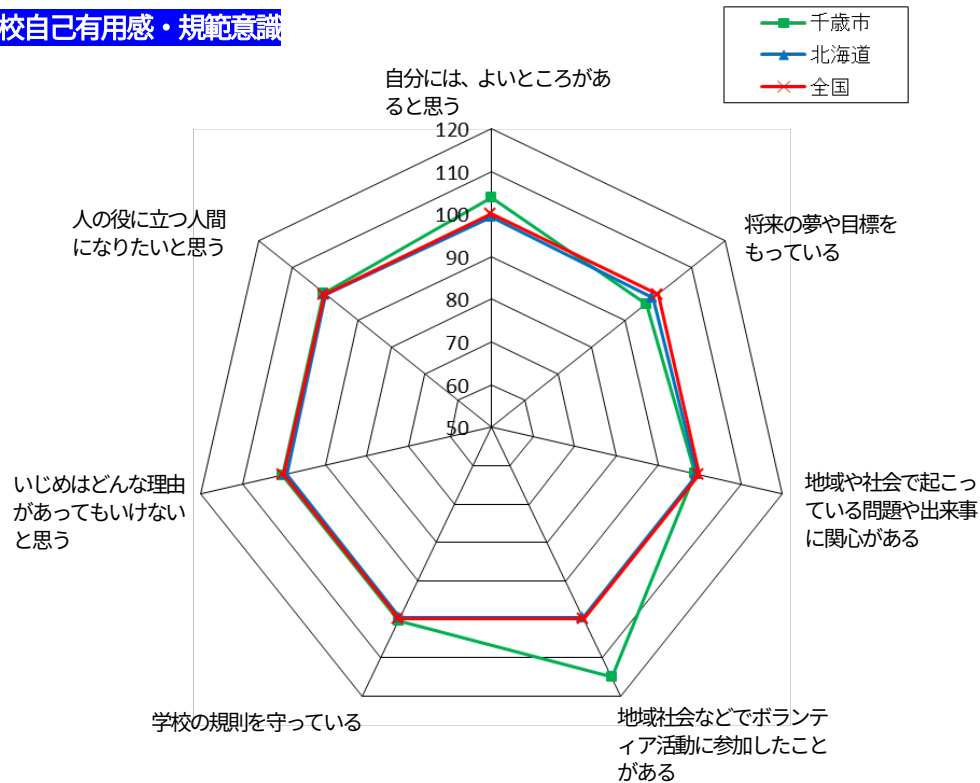


家庭での学習時間が少ない状況が見られる。

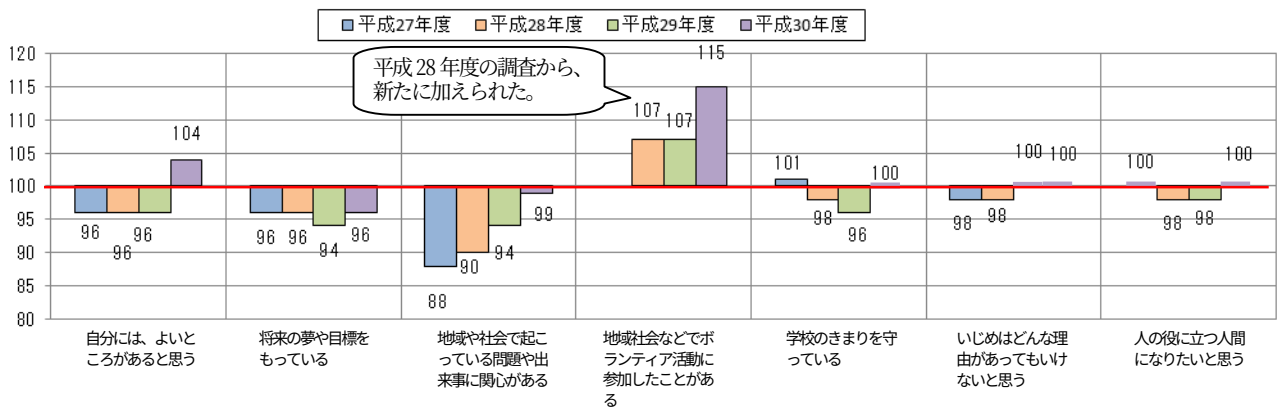
家庭での学習時間については、学校が奨励している平日「2時間以上3時間未満」勉強すると回答した生徒の割合は増加したが、依然、全国を下回る状況が続いている。「普段、3時間以上勉強している」生徒の割合は、増加傾向が見られていたが本年度は減少しており、家庭での学習時間を増やす取組を全市的に展開していく必要がある。また、「自分で計画を立てて勉強している」生徒の割合は、前年度を上回り改善が見られるが、家庭での学習時間を増やすためには、主体的に学習に取り組もうとする意欲や態度をはぐくむ必要があり、引き続き、授業と連動する家庭学習の仕方を指導したり、生徒の努力を積極的に認め賞賛したりするなどの取組を展開していく必要がある。

活用力の育成が千歳市の重要な課題となっているが、活用力を高めていくためには、複数の資料を関連付けて読み取ったり、問題を解決するために必要な情報を取捨選択する能力が必要である。新聞を読むことは、このような能力を高める効果があり、読書についても「すべての時間を勉強に費やすより、いくらかの時間を読書に割いた方が教科の学力が高い」ことが確認されていることから、本年度から「読書の時間」と「週当たりの新聞を読む回数」について取り上げ、教科の調査結果との関連を捉えていくことにした。本年度の調査では、「10分以上、読書をしている」生徒の割合は全国を上回ったが、「週に3回以上新聞を読む」生徒の割合は全国を下回った。

(6) 中学校自己有用感・規範意識



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



自己有用感、規範意識ともに高い状況が見られる。

規範意識については、「学校の規則を守っている」と回答した生徒の割合は、前年度を上回り全国と同様となり高い状況が見られる。

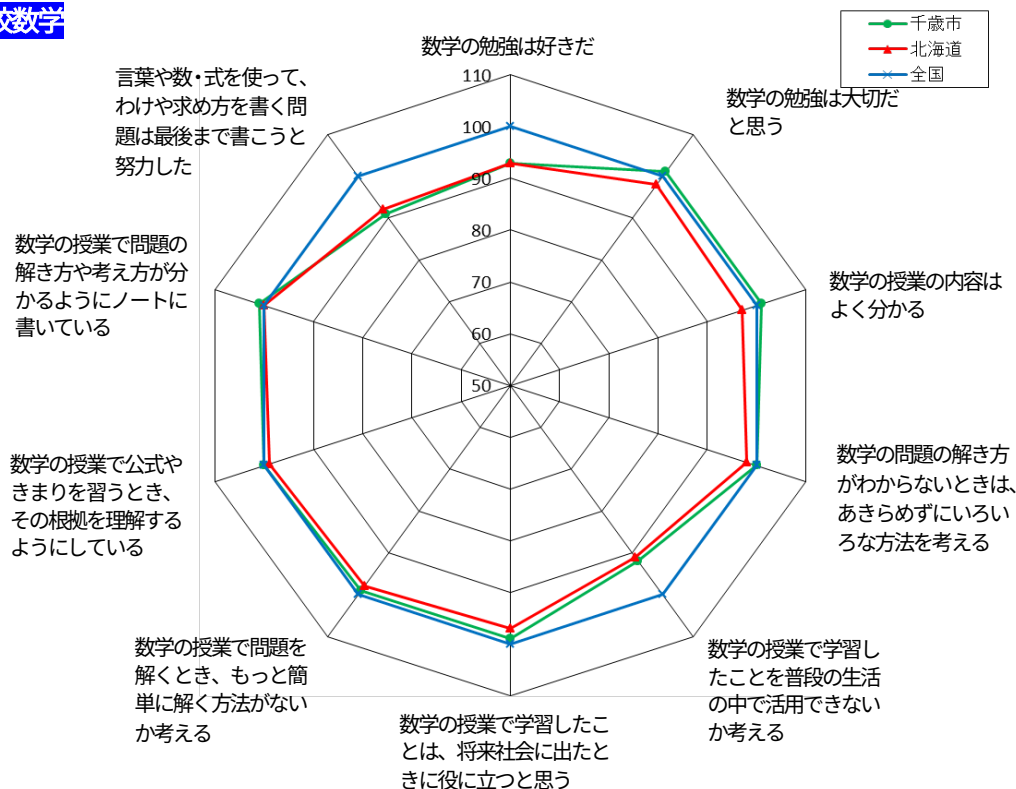
自己有用感については、「自分には、よいところがあると思う」と回答した生徒の割合が、前年度までの3年間大きな変化は見られなかったが本年度は全国を上回り、各学校の取組の成果が見られる。

地域との関わりについては、「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は、前年度を上回り、「地域社会などでボランティア活動に参加したことがある」生徒の割合についても、全国を大きく上回っており、地域や社会へ目を向け、社会の一員としての自覚をもち、積極的に行動する生徒が増加している状況が見られる。

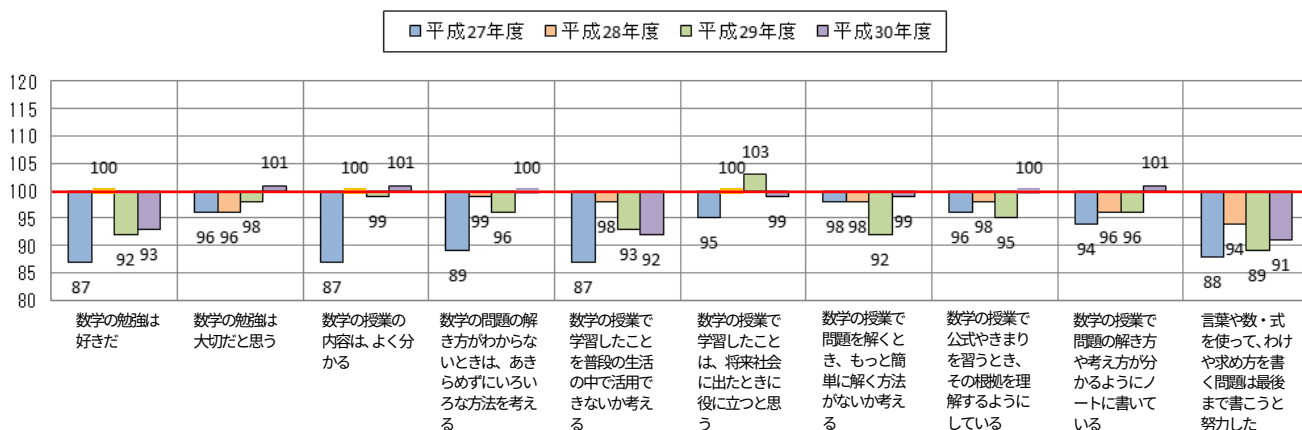
他者理解については、「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した生徒の割合は、ともに全国と同様となっており、各学校が取り組んできた「生徒によるいじめ撲滅」運動の成果が見られる。

今後もハイパーQU検査等を有効に活用し、学級集団の状況を的確に把握しながら、学級満足度を高める学級経営を推進し、自己有用感や規範意識を一層高めていくとともに、他者を思いやる心を育てていく取組を展開していくことが大切である。

(7) 中学校数学



過去4年間の千歳市の経年変化（グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を示す）



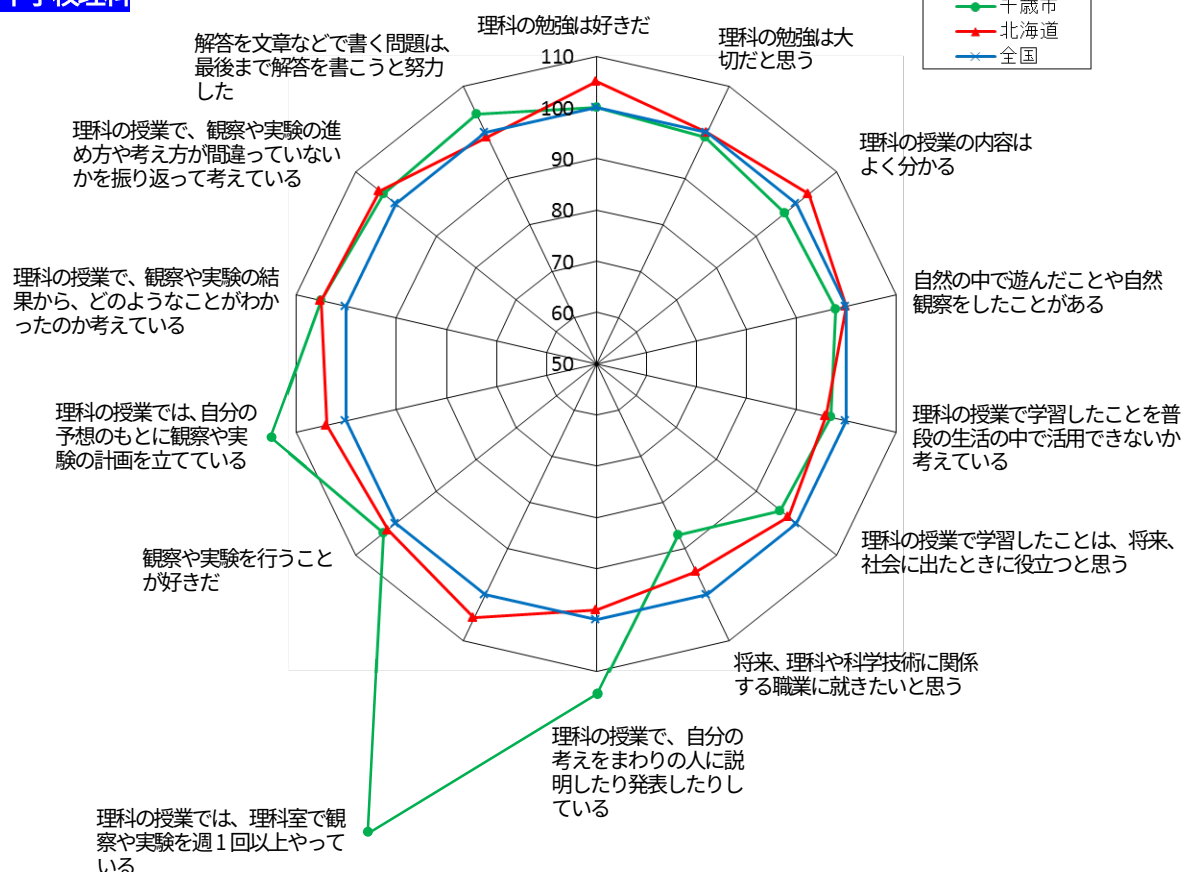
数学好きの生徒の割合は前年度と同様であるが、授業の内容を理解できている生徒は増えている。

「数学が好き」と回答した生徒の割合は、昨年と変わらず全国を下回っているが、「数学の授業の内容は、よく分かる」と回答した生徒の割合が増えており、このことが、数学の平均正答率の向上につながっていると考えられる。また、「数学の勉強は大切」「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」と回答した生徒は、全国と同様となっており、数学の有用性を感じている生徒は多い。

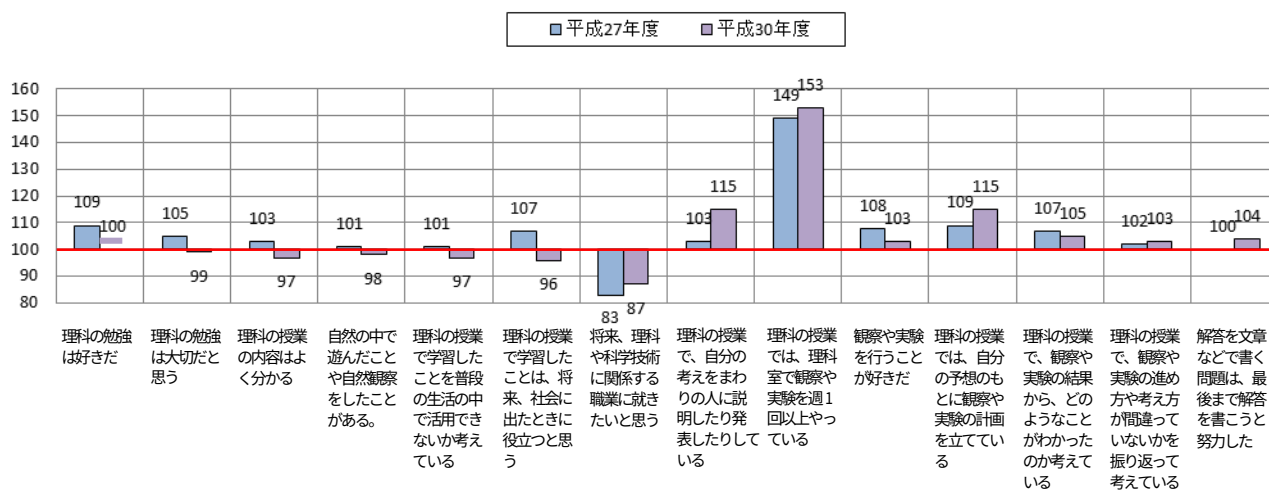
数学の学び方に関しては、「いろいろな方法を考える」「簡単に解く方法を考える」「公式やきまりの根拠を理解するようにしている」「解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」と回答した生徒の割合が全国と同様となっており、授業改善の成果が見られる。

一方で、「言葉や数・式を使って、わけや求め方を書く問題はあきらめずに書こうとした」と回答した生徒の割合は、全国を下回っており、あきらめずに記述式問題に取り組もうとする意欲や態度に課題が見られることから、今後、解き方や考え方を書くことを重視した授業を工夫し、筋道立てて考える力や言葉や数・式を使って数学的に表現できる力を高めていく必要がある。

(8) 中学校理科



平成27年度調査との比較(グラフは、全国を100としたときの千歳市の状況を表す)



観察や実験を通して科学的な見方・考え方を育て、科学的な概念を使用して考えたり、説明したりする学習活動が展開されている状況が見られる。

「理科の授業では、理科室で観察や実験を週1回以上行っている」と回答した生徒の割合が全国を大幅に上回っており、前回調査より増加している。また、「自分の予想のもとに観察や実験の計画を立てている」「観察や実験の結果から、どのようなことが分かったか考えている」「観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている」生徒の割合が全国を上回っており、観察・実験を通して科学的な見方・考え方を育てる授業が展開されている状況が見られる。

また、「理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり、発表したりしている」生徒の割合が全国を上回っており、科学的な概念を使用して考えたり、説明したりする学習活動が展開されている状況も見られる。

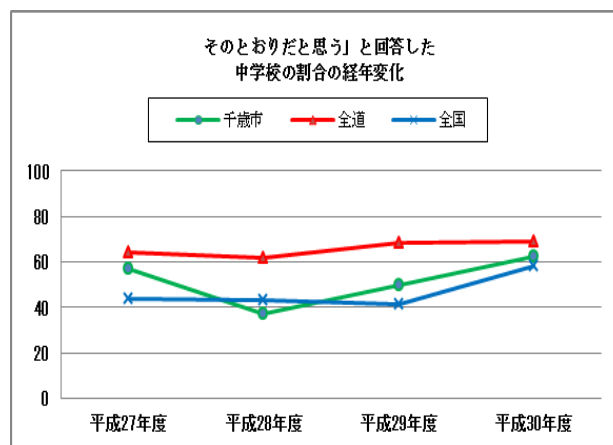
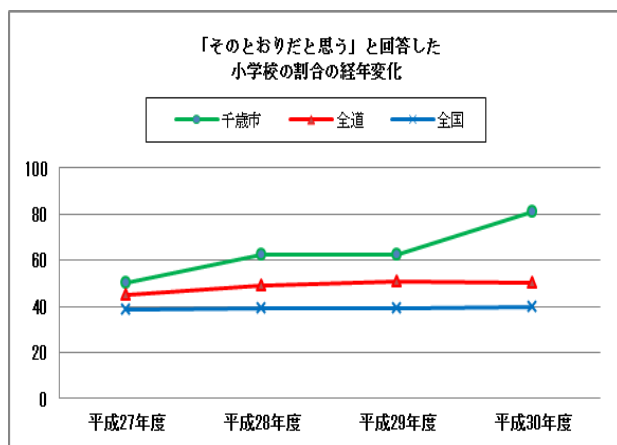
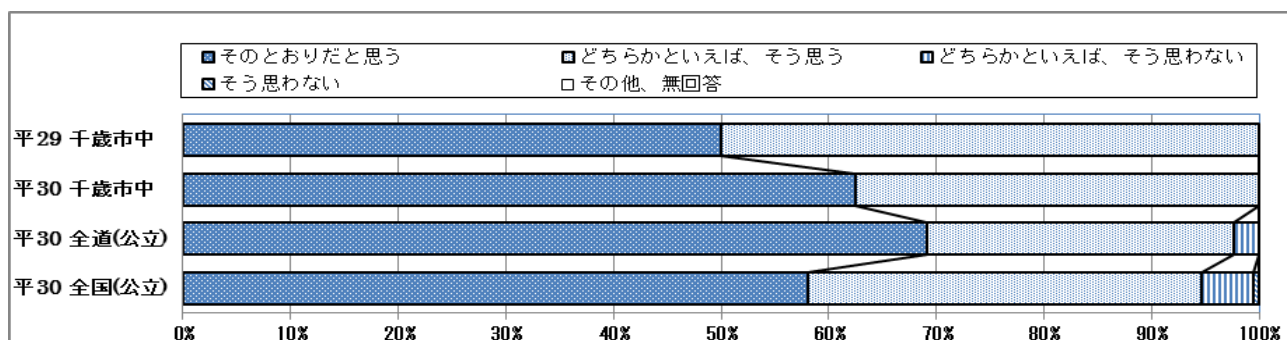
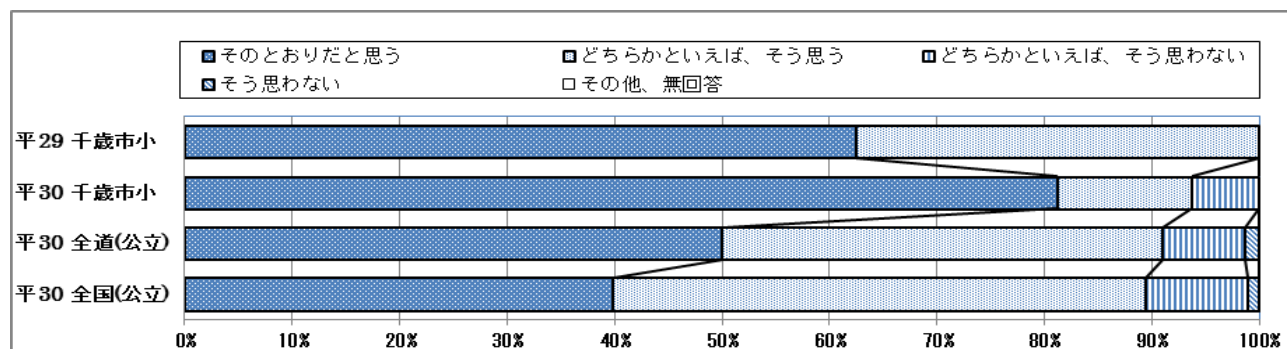
一方、「理科の授業の内容はよく分かる」生徒の割合が前回調査を下回っていることから、授業を振り返る時間を確保し、一時間一時間の学習内容を確実に理解させていく必要がある。

4. 学校質問紙の結果

1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

① 学習規律の定着

質問番号	質問事項
1 2	調査対象学年の児童（生徒）は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか。

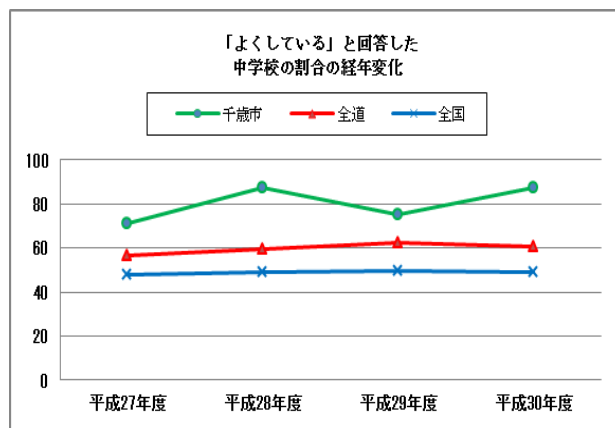
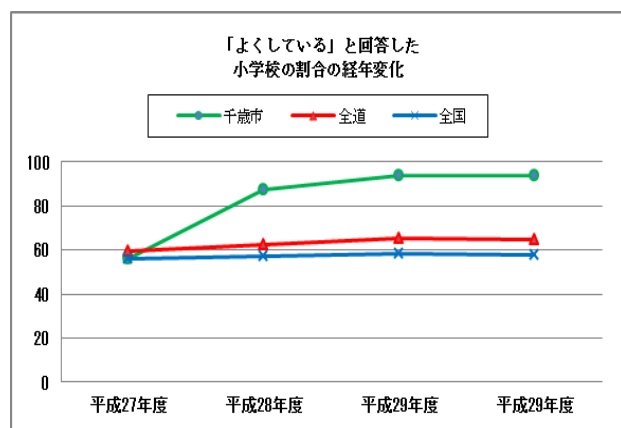
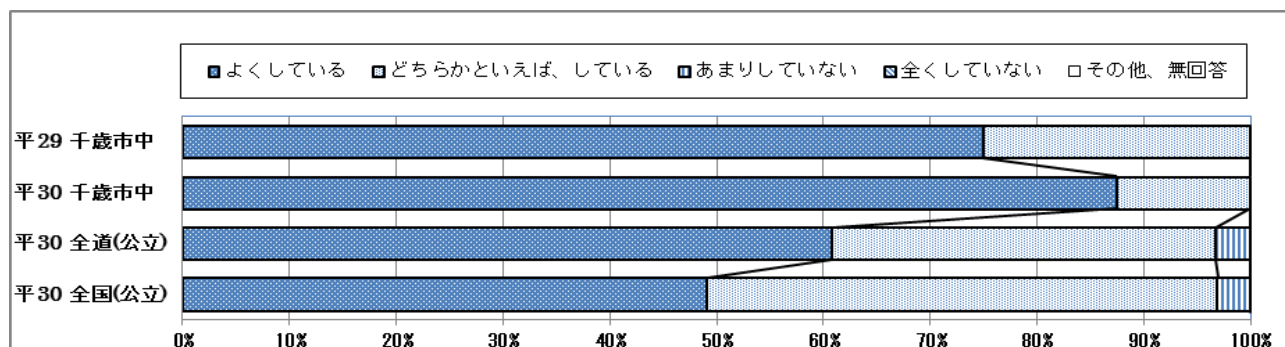
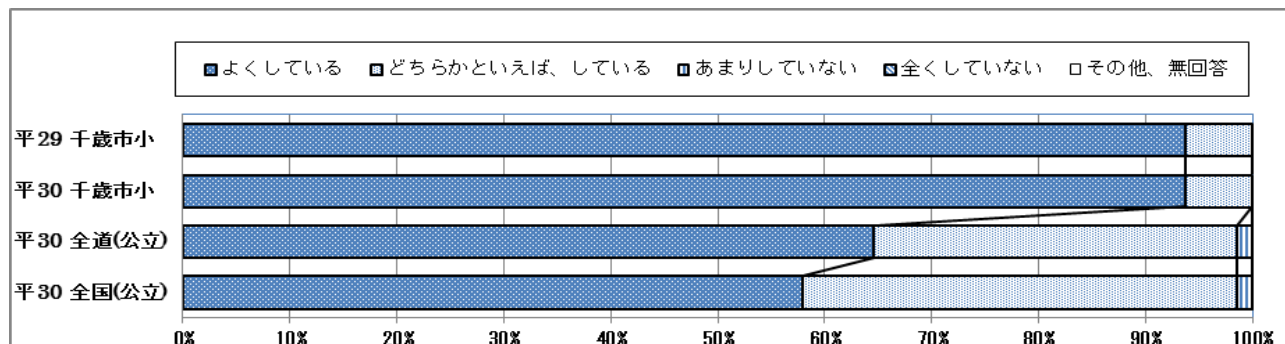


小・中学校ともに向上している

「そのとおりだ」と回答した学校は、小学校、中学校ともに増加している。小学校では、「そのとおりだ」と回答した学校が81.3%、中学校では62.5%であり、全国（小39.9%、中58.0%）を上回り、向上している。私語のない落ち着いた学習環境は学力向上の基盤である。今後も児童生徒にきまりを守ることで学習に集中でき、その結果、わかるようになり、学ぶことがおもしろくなることを理解させることが大切である。また、学年が進むことによる学級替えや担任交代等に左右されないよう、校内で統一した取組を行う必要がある。更に、年に2回市内全校（北進小中学校を除く）統一で行っているハイパーQU検査の結果をよく分析し、学級の状態を常に客観的に把握するとともに、改善策に素早く着手できるよう、校内で結果を共有し、よい取組を交流することも重要である。

② 組織的な取組

質問番号	質問事項
小 82 中 79	学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか。

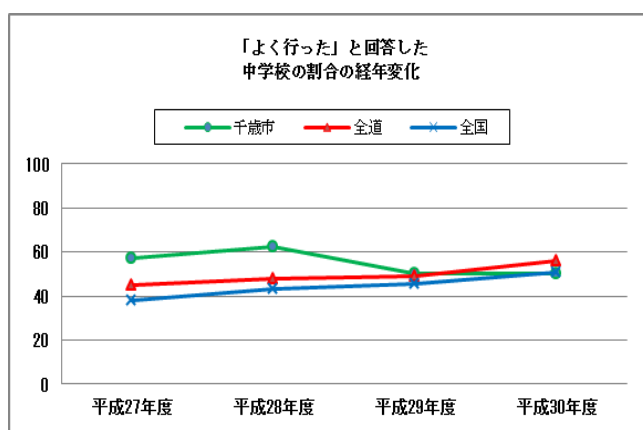
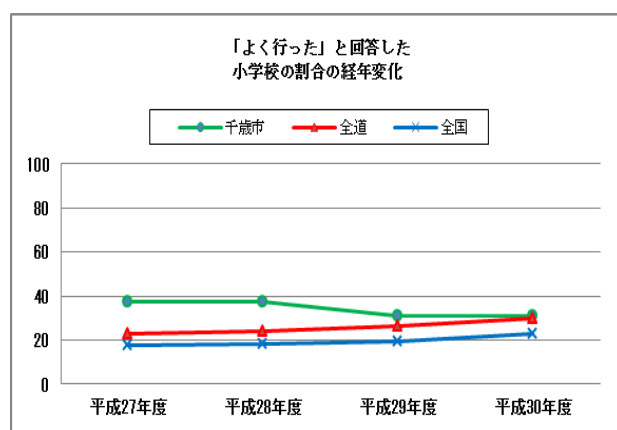
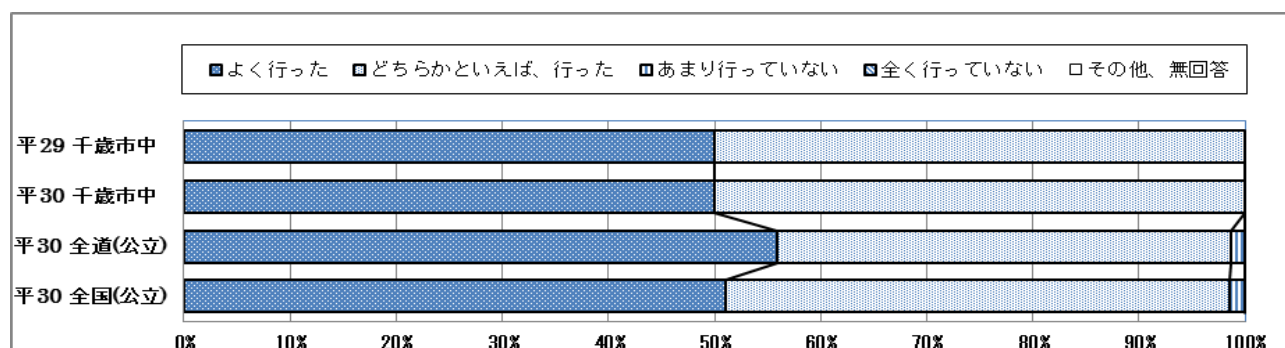
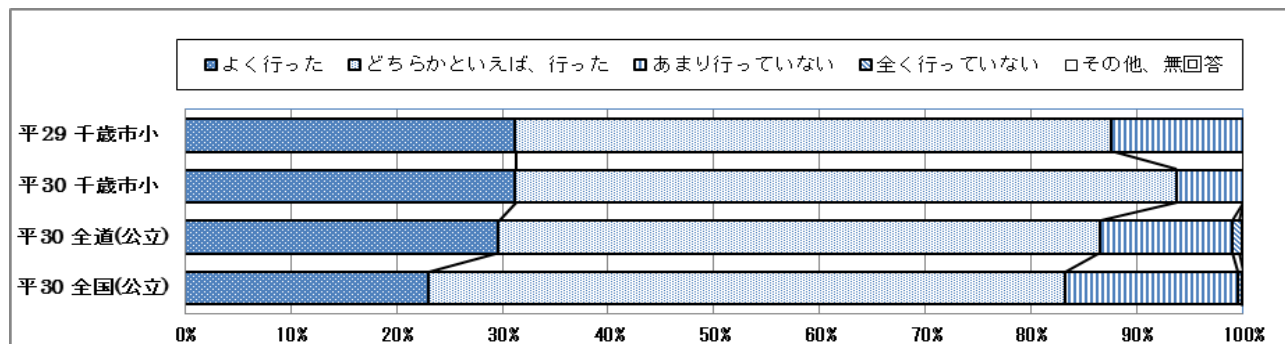


小・中学校ともに全国を上回る取組がなされている。

「よくしている」と回答した学校は、小学校 93.8%、中学校 87.5%であり、全国(小 57.9%、中 49.1%)を大きく上回る取組がなされている。この結果は、これまでも行われてきた担任の観察分析による学級経営交流に加え、ハイパーQ U検査の分析結果を校内で交流し、組織的に改善に取り組む学校が増加していることによるものと考えられる。市で行っているハイパーQ U研修会への参加や校内での研修により、個々の教員の分析能力も向上している。今後とも、検査結果に基づく客観的な実態把握をもとに、学級の状態をオープンにして、良好な状態の学級経営について学びあう学校風土を醸成し、どの子にとっても居場所のある親和的な学級集団を育成する必要がある。更に、個々の学級の状態を敏感に察知し、学級経営計画、および人員配置の見直しを組織的かつ機動的に行う体制づくりが重要である。

③ キャリア教育

質問番号	質問事項
小 23 中 22	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか

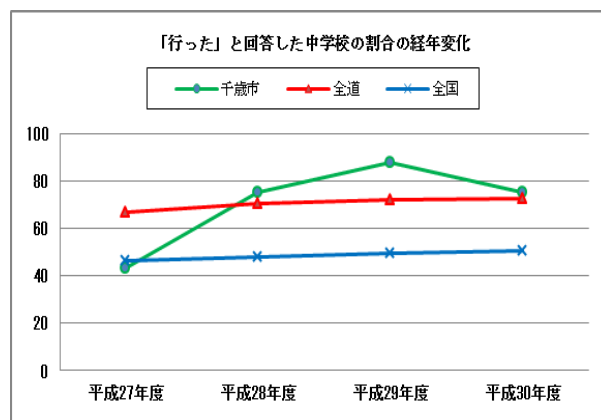
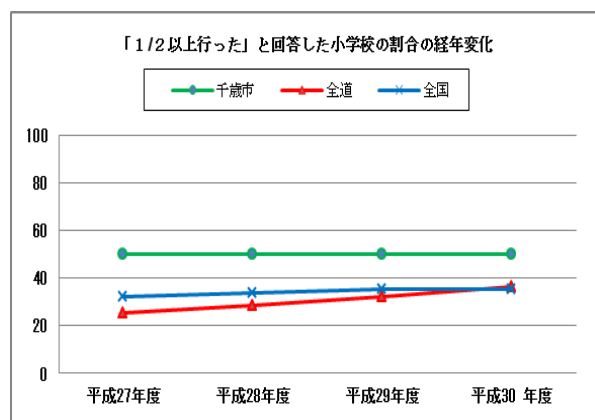
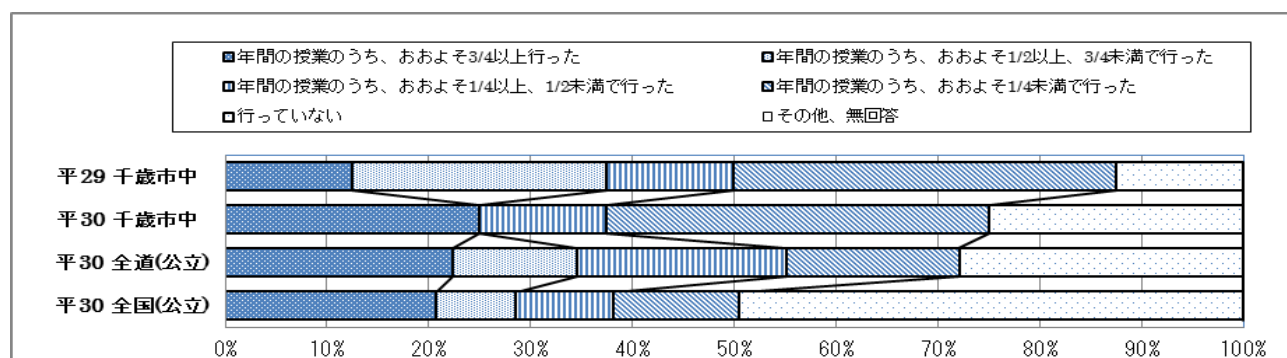
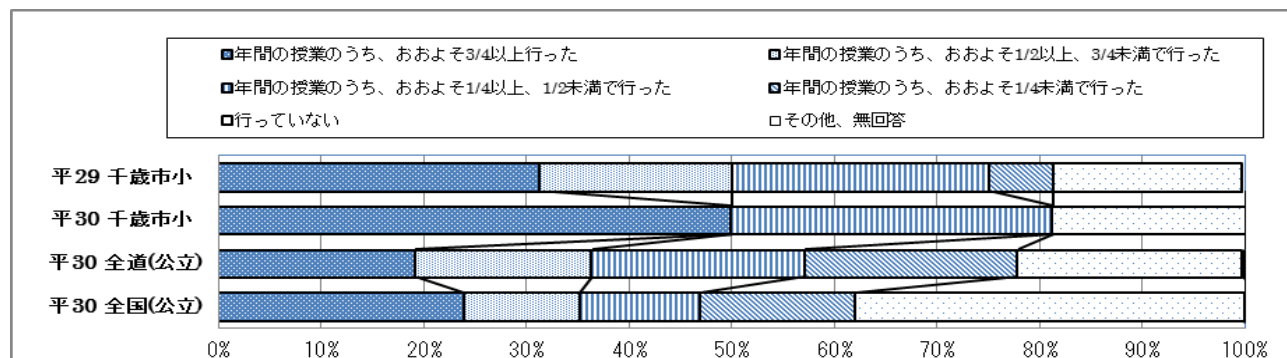


小学校は全国を上回り、中学校は全国同様の取組が行われている。

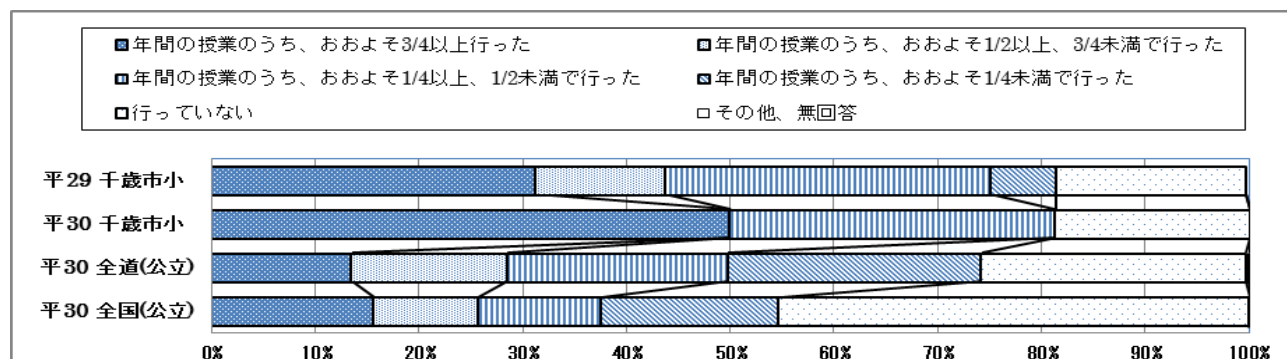
「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をよく行った」と回答した小学校は、前年度同様37.5%であり、全国(23%)を14.5ポイント上回っている。中学校においても「よく行った」と回答した学校は前年度と同じく50%であり、全国(51.1%)同様である。児童生徒質問紙において「将来の夢や希望をもっている」と回答した児童生徒は、全国を100とした指数で小学校においては100.1ポイント、中学校では97.4ポイントである。夢や希望をもって将来の生き方や生活を考え、前向きに自己の将来を設計する将来設計能力の指導については、引き続き一層の充実を図る必要がある。各学校においては、全ての教育活動が児童生徒のキャリア形成につながっていることをふまえ、道徳教育はもとより、ボランティア活動や地域人材の活用、職場体験学習等の取組を通して自尊感情や自己有用感を高め、社会人としての自立を目指す積極的な姿勢を育て、夢や目標をもって学校生活を送らせることが必要である。

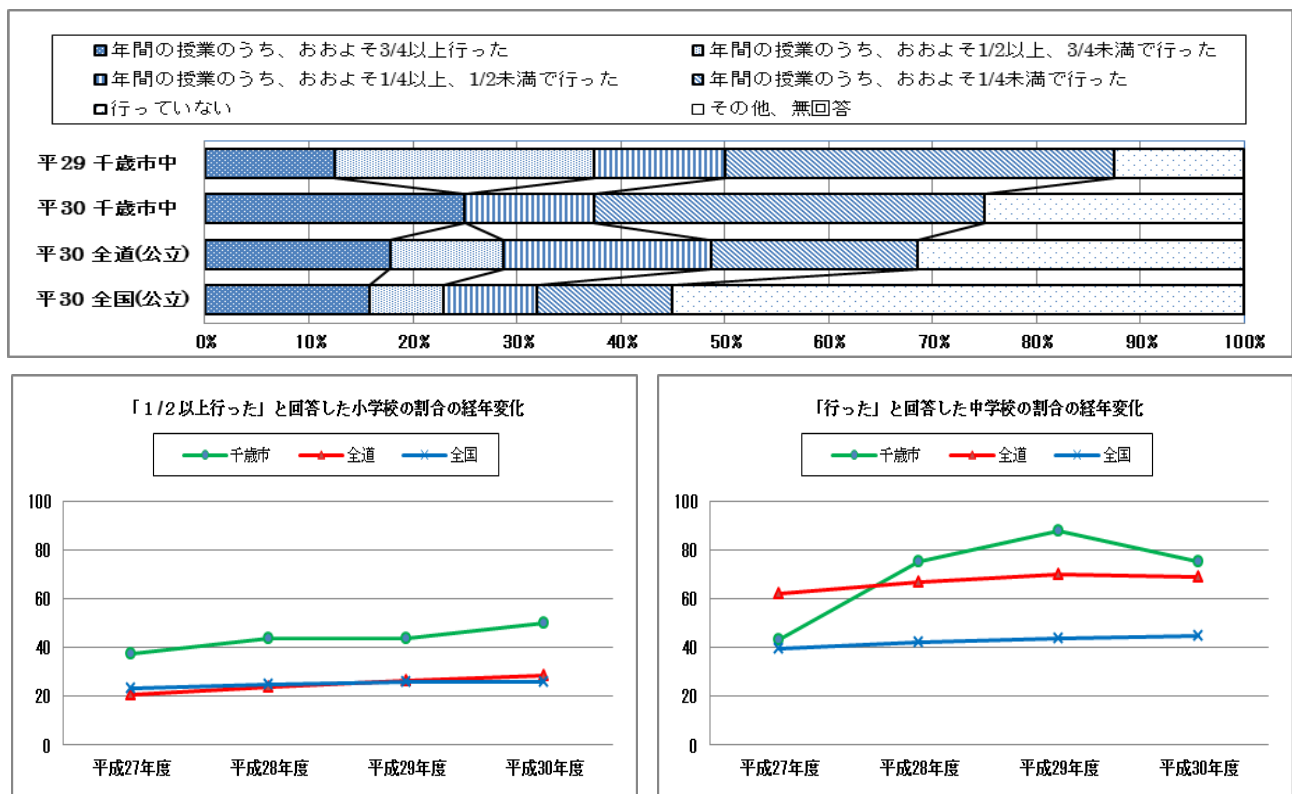
④ 習熟度別少人数指導の充実

質問番号	質問事項
小 3 5 中 3 4	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにしましたか



質問番号	質問事項
小 3 6 中 3 5	調査対象学年の児童（生徒）に対して、算数（数学）の授業において、前年度に、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか





小・中学校ともに「習熟の遅いグループ」に対しても「習熟の早いグループ」に対しても実施状況が全国を大きく上回る。

小学校においては、「習熟の遅いグループ」「習熟の早いグループ」とともに年間の授業の二分の一以上で習熟度別少人数指導を行っている割合（遅いグループ：千歳市 50%、全国 35.2%）（早いグループ：千歳市 50.0%、全国 25.7%）が全国に比べてかなり高い。特に年間で四分の三以上行っている割合はいずれのグループにおいても 50.0%と、昨年（いずれも 31.2%）より増加した。4 か年の経年変化においても、習熟の早いグループに対する指導に大幅な上昇が見られ、市の施策として小学校 13 校に配置している「学習支援員」による取組が浸透している様子が覗える。今後も両者に対する積極的な対応が求められる。

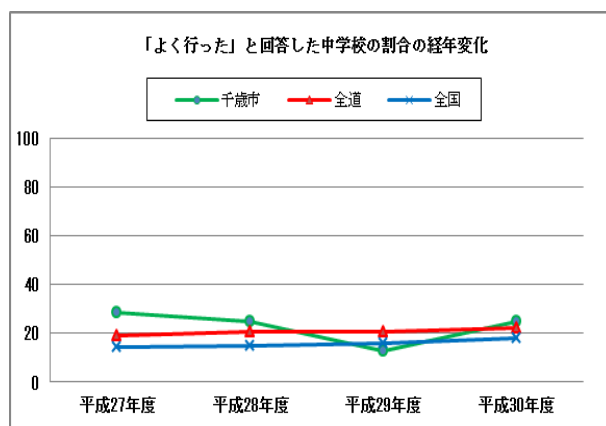
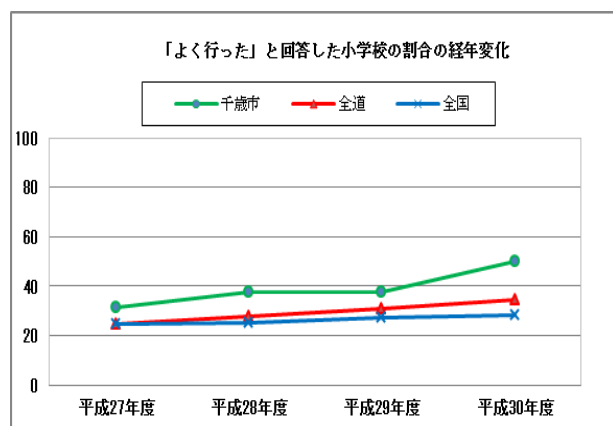
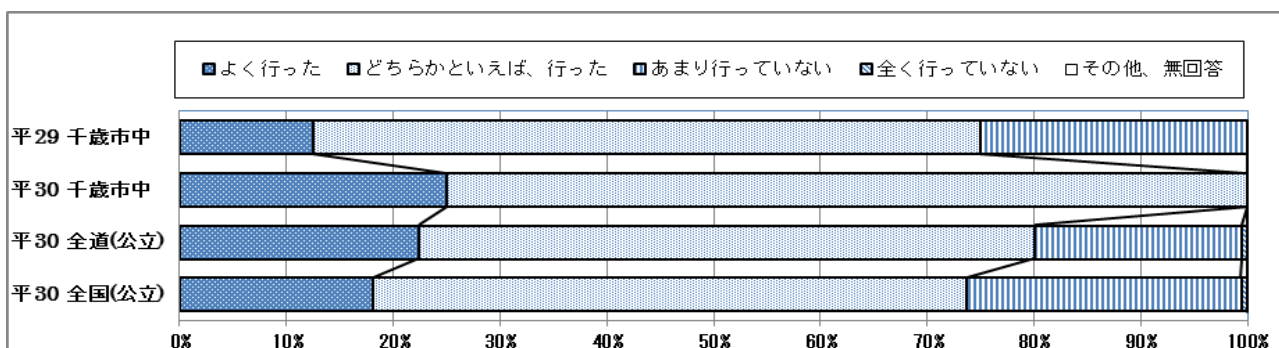
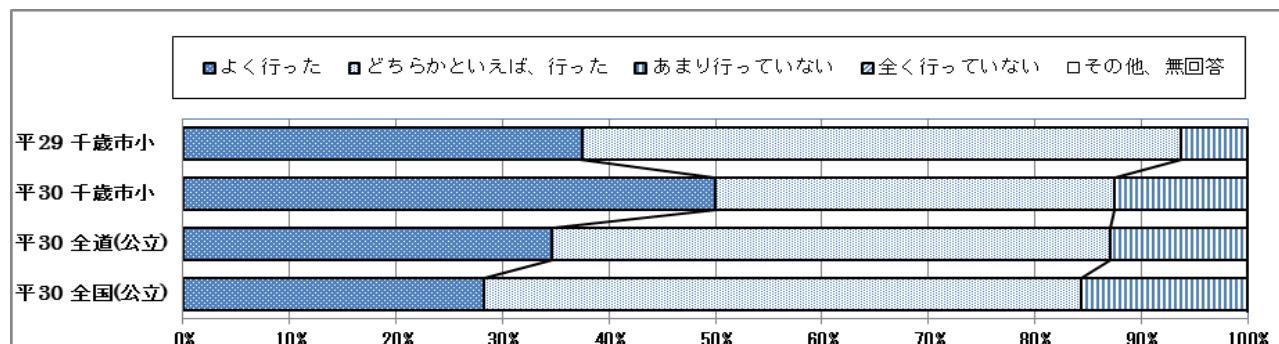
中学校においては、習熟度別少人数指導の実施状況が昨年度より遅いグループ、早いグループともに 12.5 ポイント減少したが、年間で四分の三以上行っている割合（遅い 25.0%早い 25.0%）は、昨年（遅い 12.5% 早い 12.5%）にくらべていずれも 12.5 ポイント増加し、全国（遅い 20.7% 早い 15.8%）に比べ、高くなっている。

児童生徒質問紙において「算数・数学が好き」「算数・数学の勉強は大切だと思う」「算数・数学の内容がわかる」と回答した児童生徒が全国を 100 とした指数でそれぞれ、小学校では 94.5 ポイント、98.4 ポイント、97.4 ポイント、中学校では 92.6 ポイント、101.1 ポイント、101.1 ポイントであり、各学校が校内における指導体制の確立や授業後半に習熟度別指導を行うなど具体的な工夫に取り組んできた成果が定着してきている。

今後においても、学校種、学校規模に関わらず、個に応じたきめ細かな学習指導を実施し、学習内容の確実な習得を図ることが必要である。特に算数・数学の授業においては、「指導方法の工夫改善による加配教員」や「学習支援員」などを活用した指導体制を整備し、児童・生徒の習熟の程度に応じた指導の一層の充実を図っていくことが必要である。

⑤ 家庭学習の習慣づくり

質問番号	質問事項
小 65 中 35	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を与えましたか（国語／算数・数学共通）



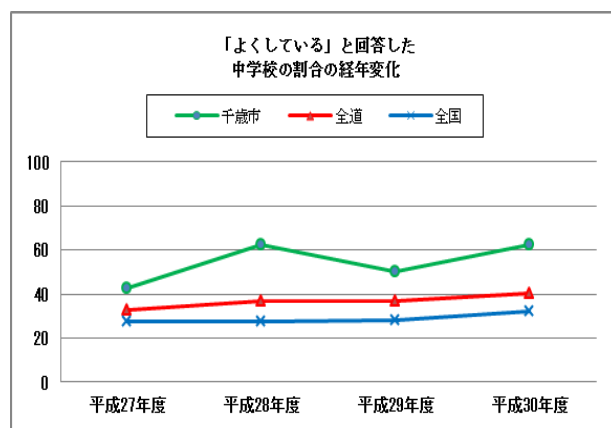
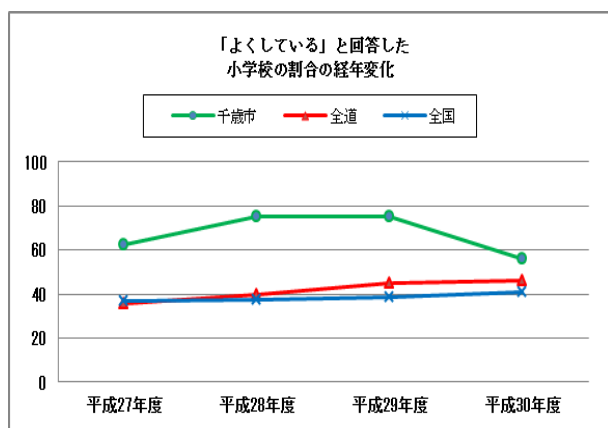
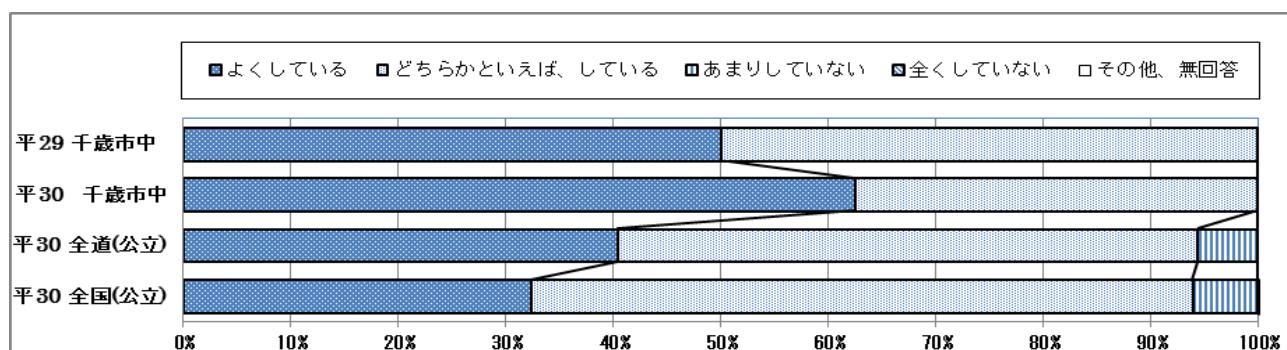
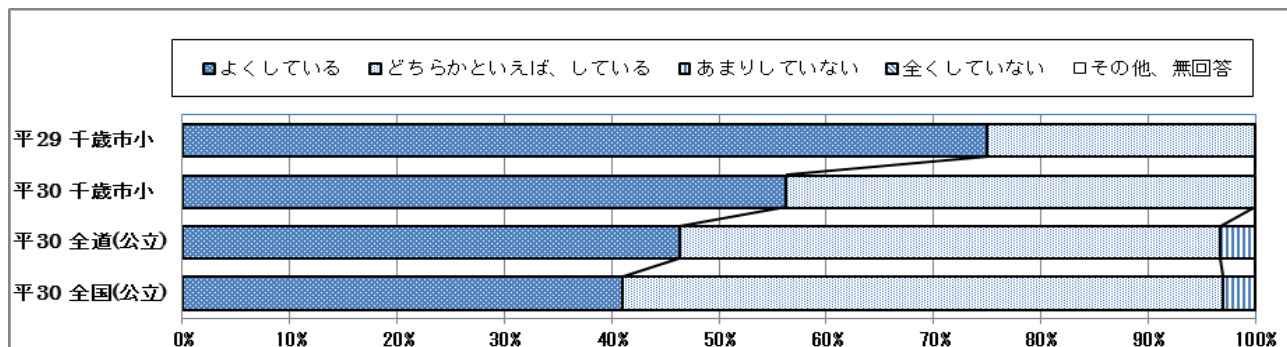
小・中学校ともに全国を上回る。

「よく行った」と回答した小学校は前年度より12.5ポイント増加し50.0%、中学校は前年度より12.5ポイント増加して25.0%となっており、全国（小28.3%、中18.1%）との比較では小・中学校ともに上回っている。学校は家庭学習の習慣が身に付くよう、そのきっかけ作りとして宿題を提供している。児童・生徒質問紙において「家で学校の宿題をするか」という質問に対し「している」と回答した児童・生徒は全国を100とした指数で小学校では99.0ポイント、中学校では101.7ポイントと、よく取り組んでいる。今後は宿題の量のみならず、内容について改善を加えていく必要がある。国語辞典や漢字(和)辞典を日常的に利用して調べたり、語句の適切な用い方を調べたりする学習、新出漢字や語句を使った短文づくり、答えを求めるまでに複数の段階がある問題において示された情報を整理し、筋道を立てて考え、求め方を言葉や式を用いて記述するなど、「書いて表現する力」を伸ばす工夫が大切である。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して

⑥ 教職員研修の充実

質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
小 78 中 75	教職員は、校内外の研修や研究会に参加し、その成果を教育活動に積極的に反映させていますか。

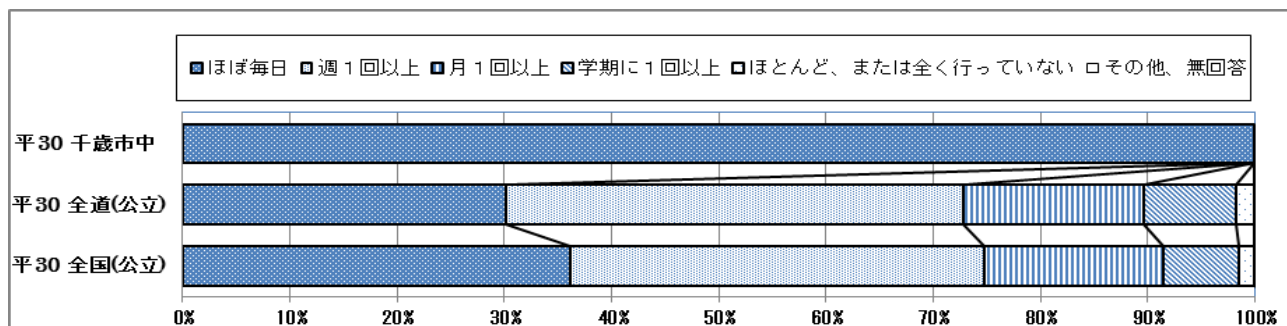
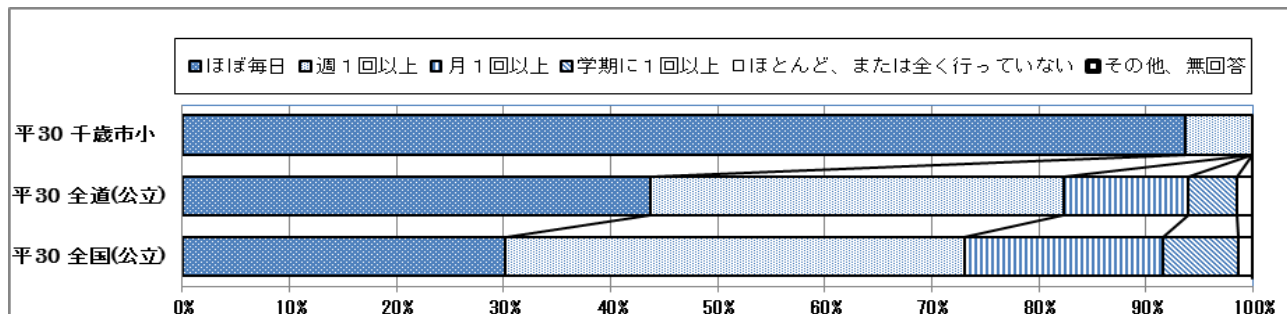


研修結果を生かす取組が行われている。

「よくしている」と回答した学校の割合(小 56.3%、中 62.5%)は、小・中学校ともに全国(小 41.0%、中 32.3%)を上回る。前年度(小 75.0%、中 50.0%)との比較では、小学校は 18.7 ポイント減少し、中学校では 12.5 ポイント増加した。いずれも教員の研修については長期休業中に開催される千歳市教育委員会主催の研修や石狩教育研修センター主催の研修に参加し、個別の学校では招聘できない全国的に著名な講師から直接教示を受けたり、授業期間には少ない時間を有効に活用したミニ研修や授業研究に取り組んだりしており、今日的課題に対応できる能力や授業力向上を目指す研修の充実が図られている。今後は、個々の教員が受講した研修の結果を積極的に校内全体に還元し、授業改善に結びつく指導方法や教育課程の見直しを、より促進される校内の研修体制を構築していく必要がある。

⑦ I C T 機器の活用

質問番号	質問事項
小 28 中 27	調査対象学年の児童（生徒）に対する指導において、前年度に教員が大型提示装置（プロジェクター、電子黒板等）等の I C T を活用した授業を 1 クラスあたりどの程度行いましたか。



＊今年度からの質問

小・中学校とも積極的に活用されている。

「ほぼ毎日」と回答した学校は（小 93.8%、中 100%）であり、全国（小 30.2%、中 36.2%）と比較しても小・中学校ともに積極的に活用されている。

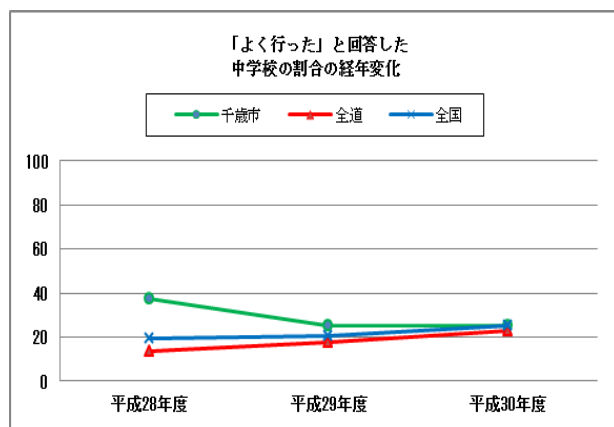
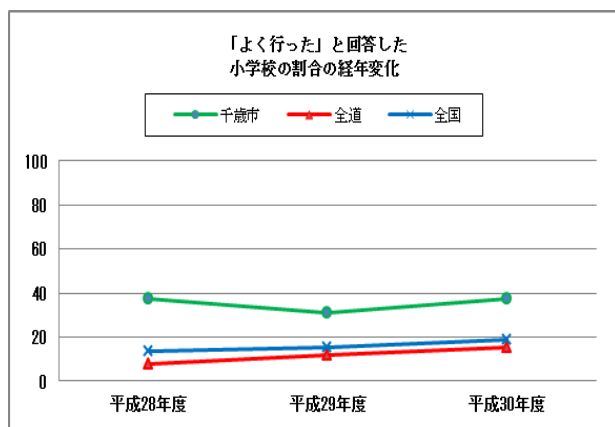
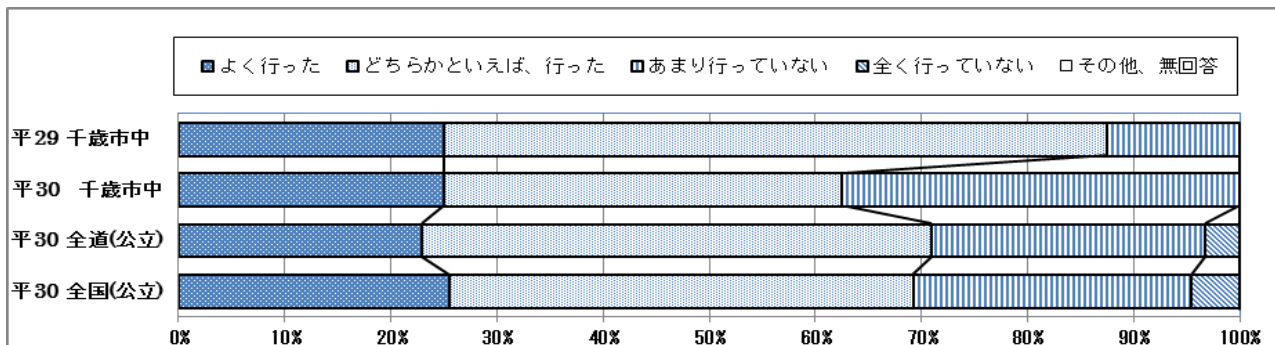
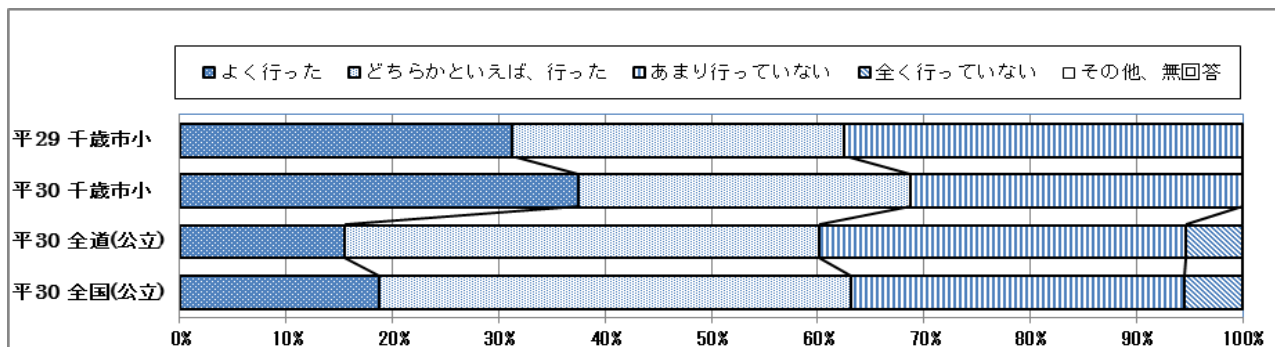
I C T 機器は、全ての学校において日常的に授業で活用されており、千歳の教育の特色となっている。全普通教室、さらに学校から要望のあった小学校少人数指導用教室、中学校特別教室、小・中学校特別支援学級教室への電子黒板・実物投影機等の配備に加え、デジタル教科書についても、平成 28 年度までに小・中学校への配備を終えたことから、全国、全道に比べて圧倒的に活用頻度が高い。

今後は、授業でのより効果的な活用方法等について校内外での研修を充実させ、授業改善に生かす取組を進めることが大切である。

3 小中連携・一貫教育の取組に関して

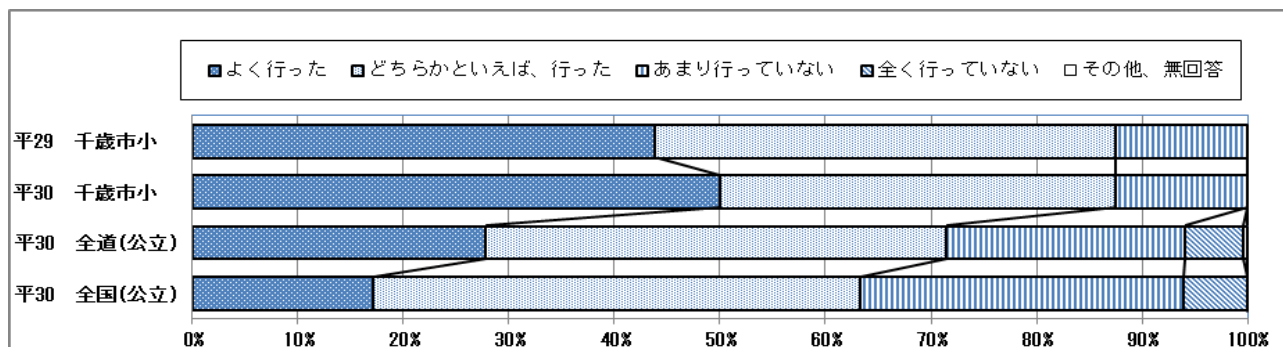
⑧ 教育課程に関する共通の取組

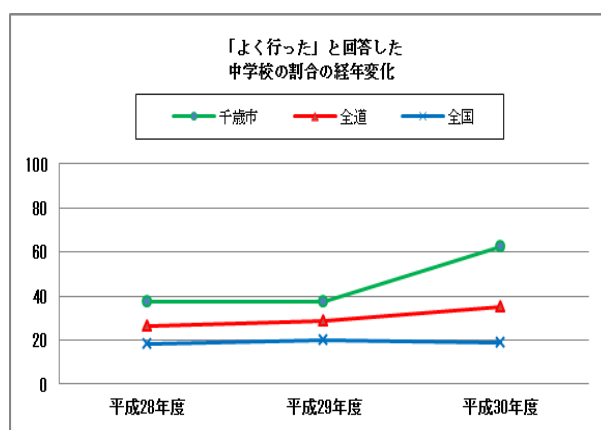
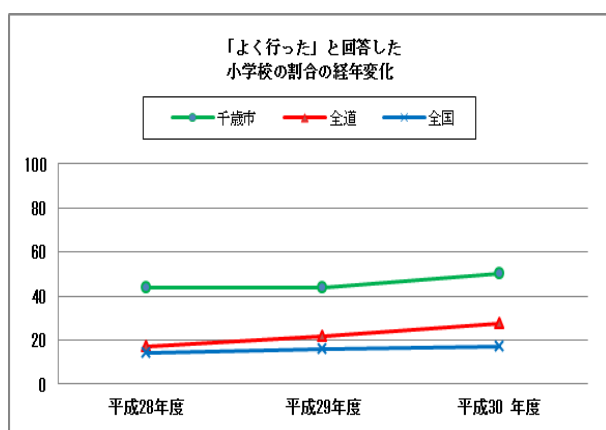
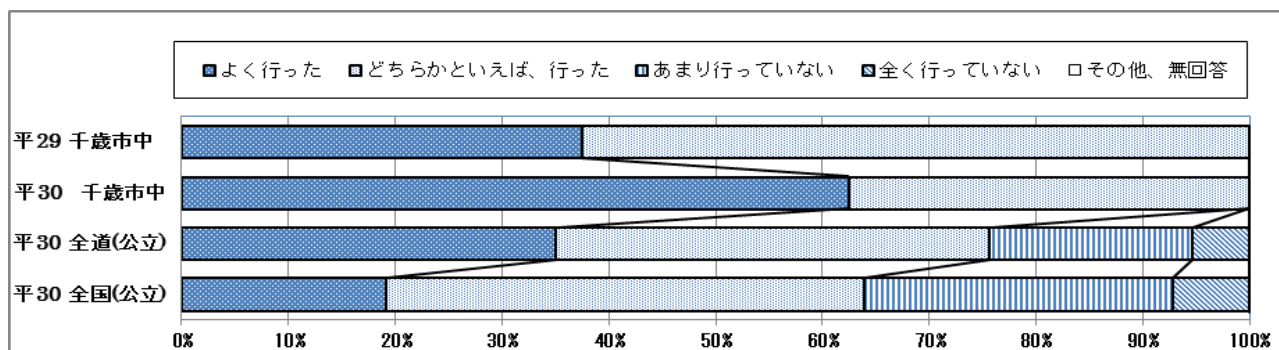
質問番号	質問事項
小 21 中 20	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行いましたか。



⑨ 全国学力・学習状況調査分析結果の共有

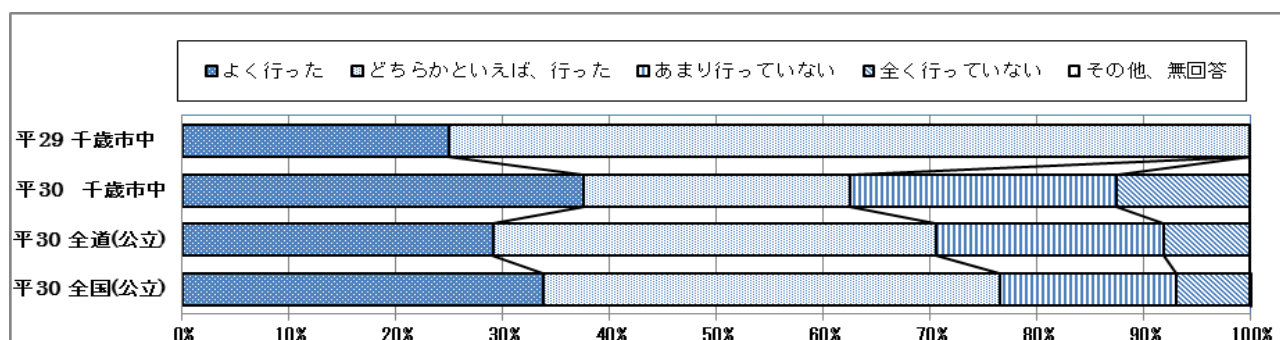
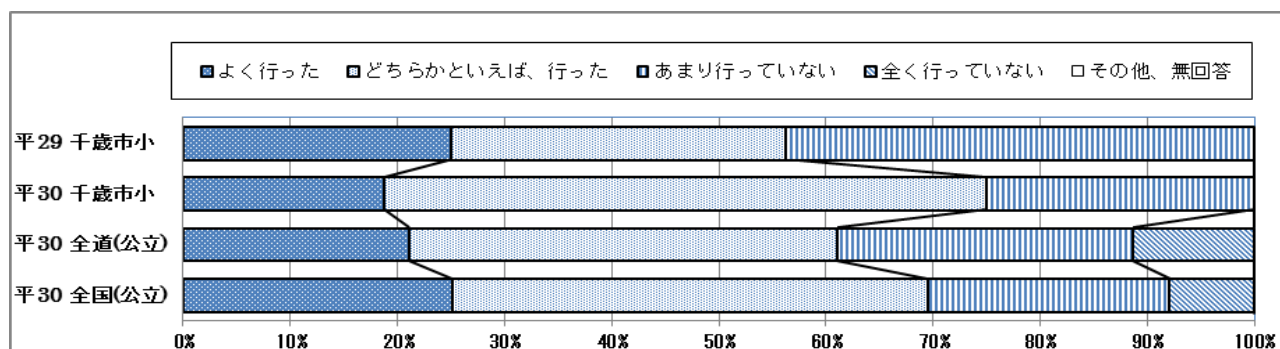
質問番号	質問事項
小 3 4	平成 29 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有しましたか。
中 3 3	

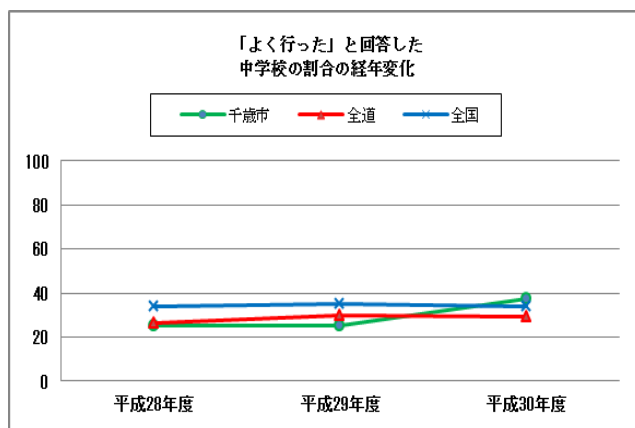
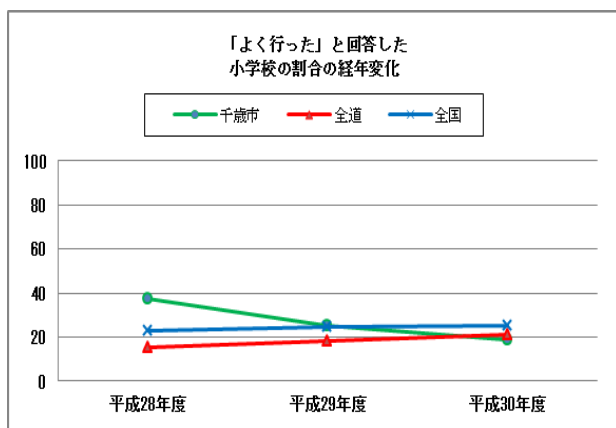




⑩ 合同の研修

質問番号	質問事項
小 77 中 74	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行いましたか。





小中連携・一貫の取組は今後深まっていくことが期待される

⑧「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」という質問に対して、「よく行った」と回答したのは、小学校で 37.5%、中学校で 25%であり、全国（小 18.7%、中 26.1）と比較して、小学校は全国を上回っており、中学校は同様である。

⑨「平成 29 年度の全国学力・学習状況調査の分析結果について、近隣等の中（小）学校と成果や課題を共有したか」という質問では、「よく行った」と回答したのは小学校で 50.0%、中学校では 62.5%であり、全国（小 23.9%、中 19.1%）を大きく上回っている。

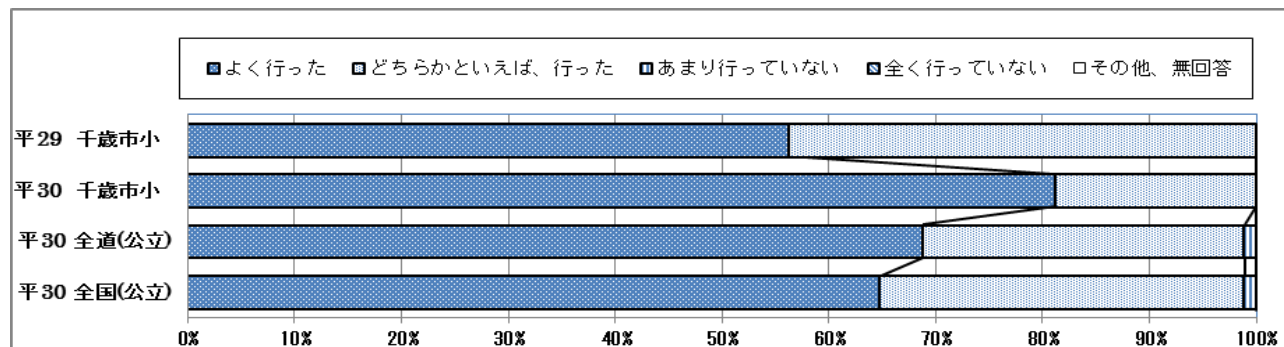
⑩「前年度までに、近隣等の中（小）学校と、授業研究を行うなど、合同して研修を行ったか」という質問に対して「よく行った」と回答したのは、小学校で 18.8%、中学校では 37.5%であり、全国（小 25.1%、33.8%）と比べて小学校は少ないが、中学校は多くなっている。

小中連携・一貫教育の取組に関しては、以前から連携を進めてきたが、市として今年度からモデル校区を指定し、本格的に取り組む始めたところである。今後は、全国学力・学習状況調査結果の共有をはじめとして、校区の子どもたちの義務教育 9 年間で身に付けさせるべき力を明確にして、授業や教育課程について連携して取り組んでいくことが一層望まれる。

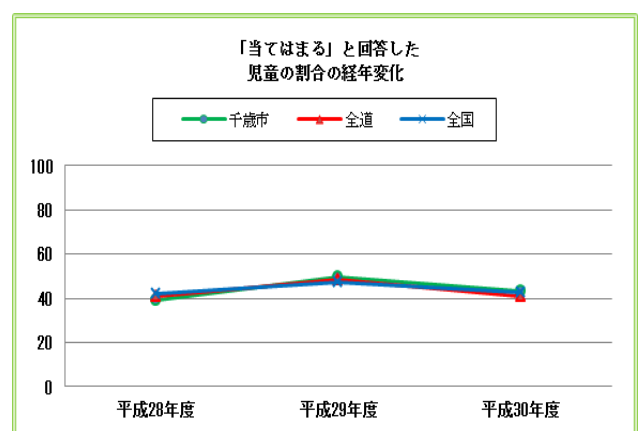
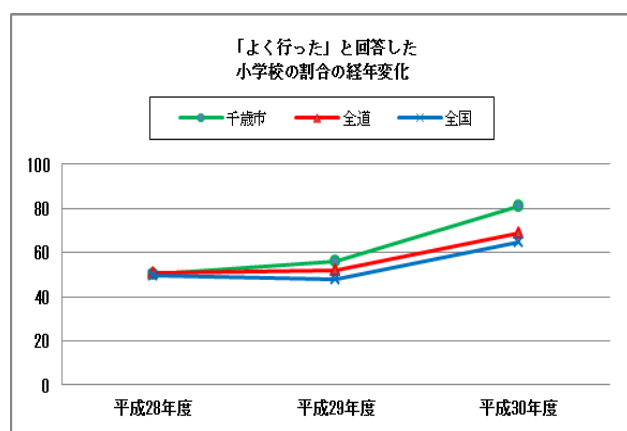
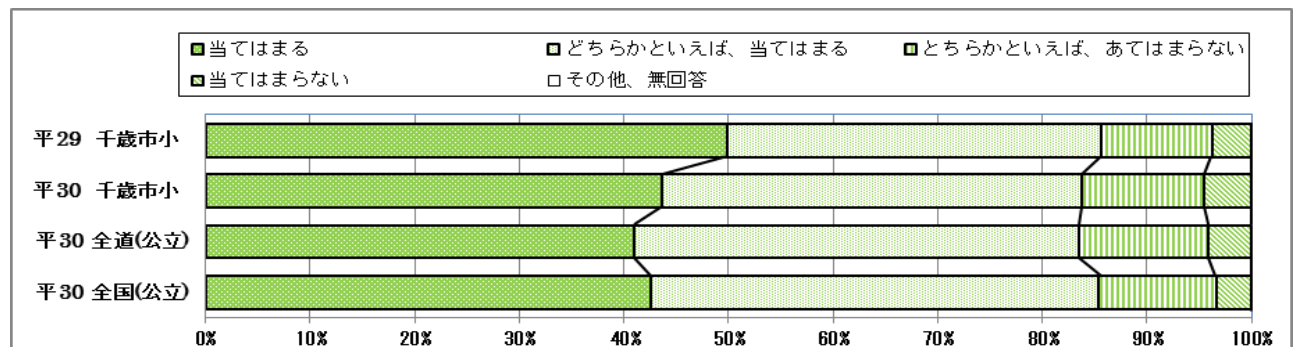
4 授業や評価に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問紙の回答と比較）

⑪ 良さの評価

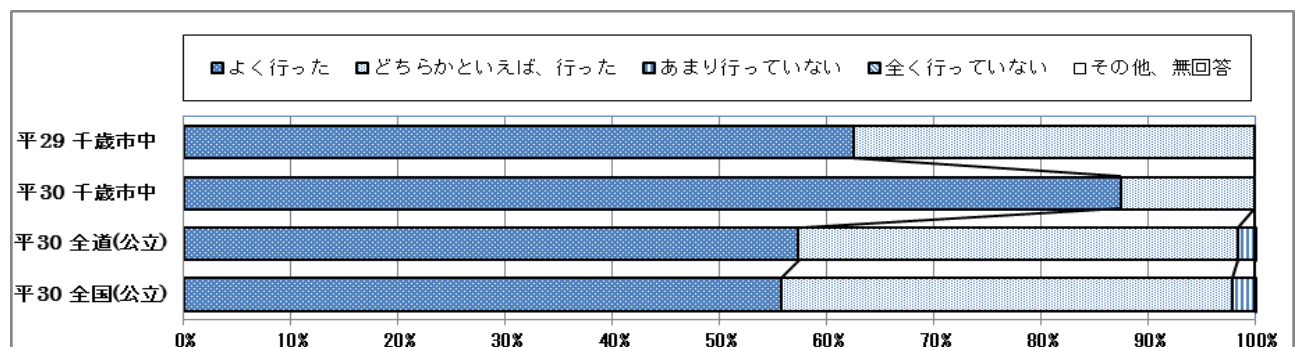
質問番号	質問事項
30	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、学校生活の中で児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行いましたか。



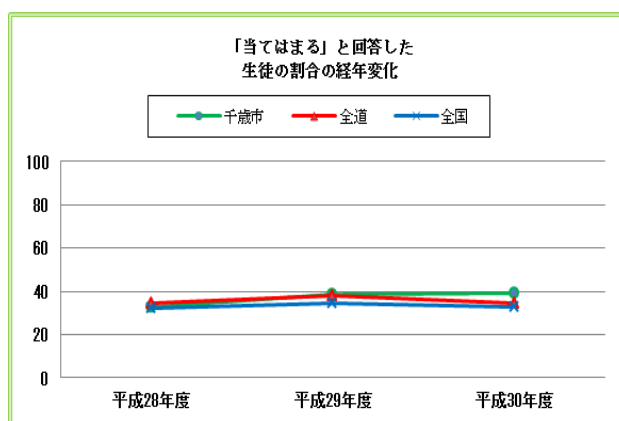
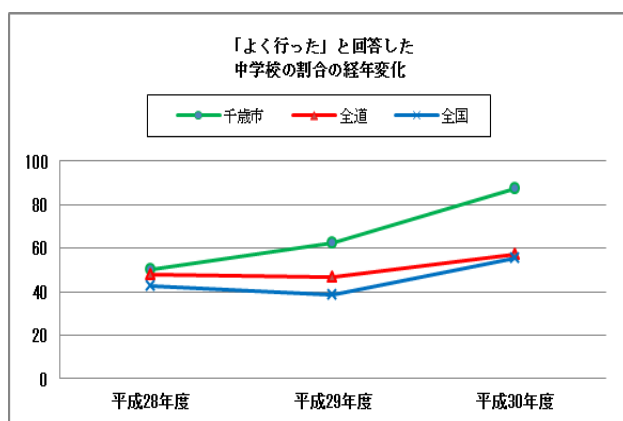
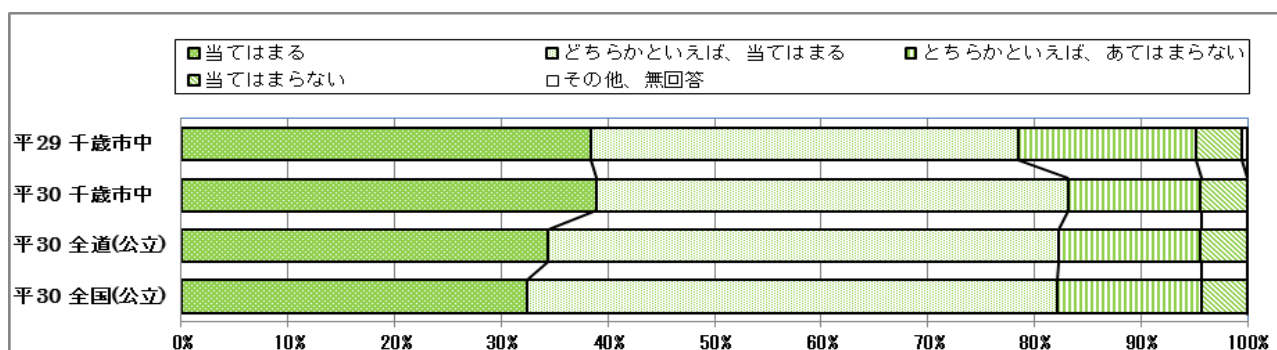
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
2	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。



質問番号	質問事項
29	調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、学校生活の中で児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行いましたか。

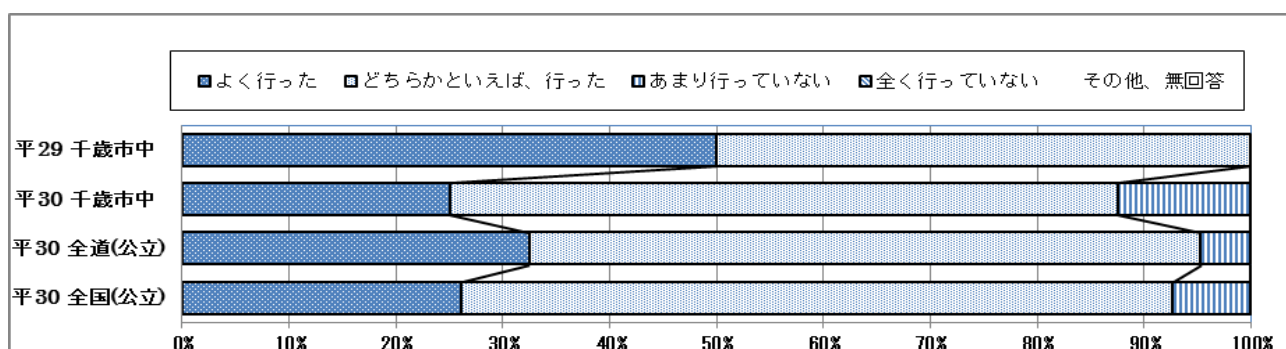
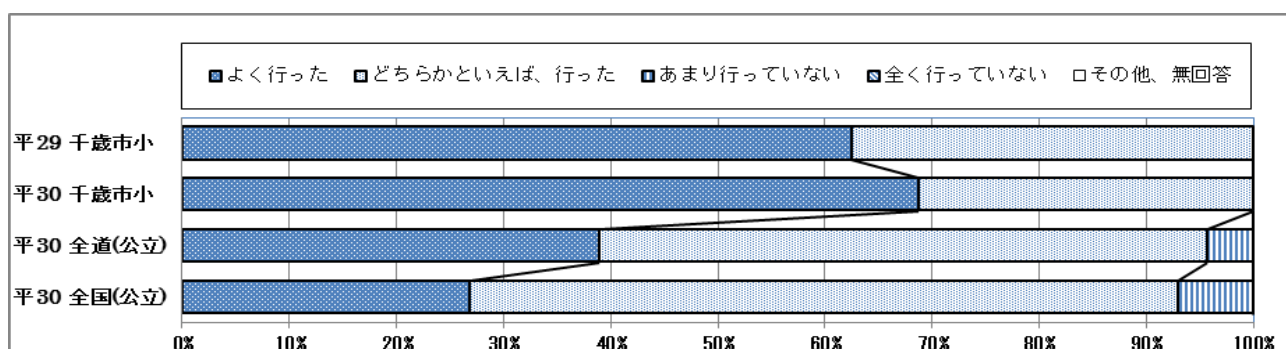


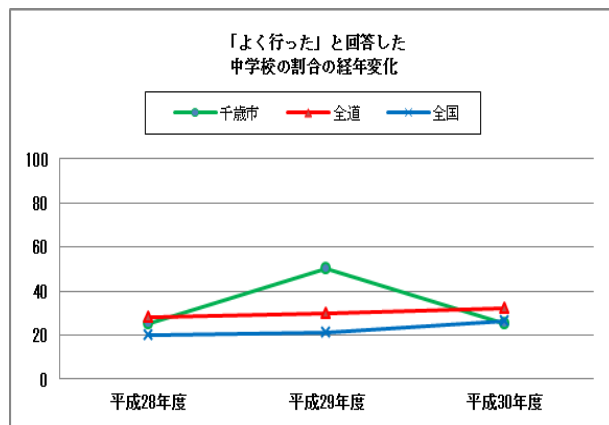
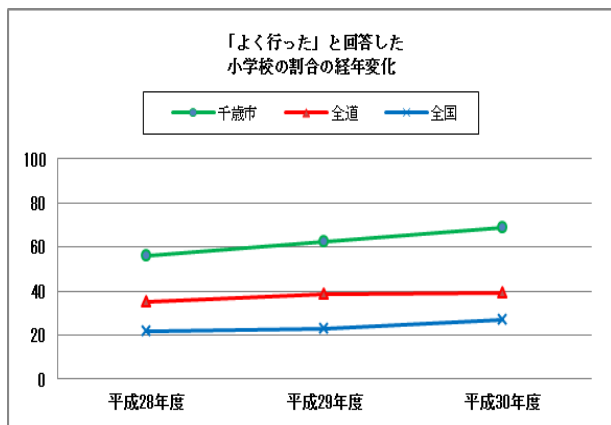
質問番号	質問事項（＊生徒質問紙）
2	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。



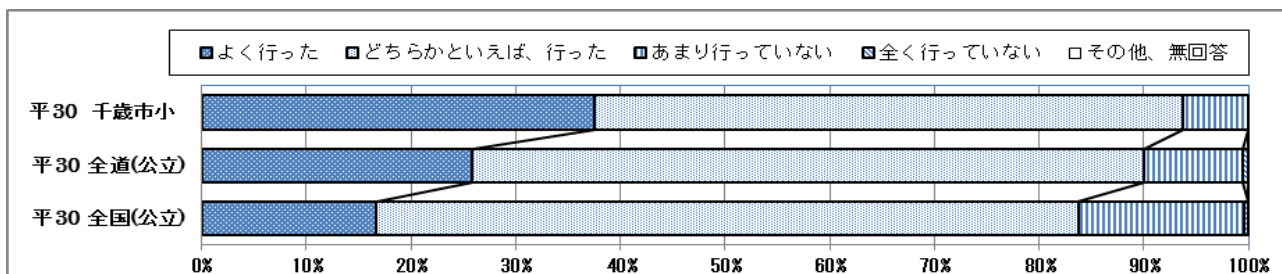
⑫ 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善

質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
小 2 2	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。
中 2 1	

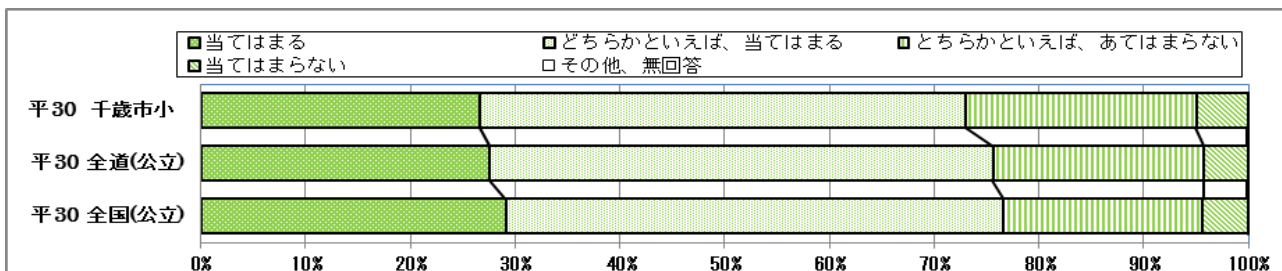




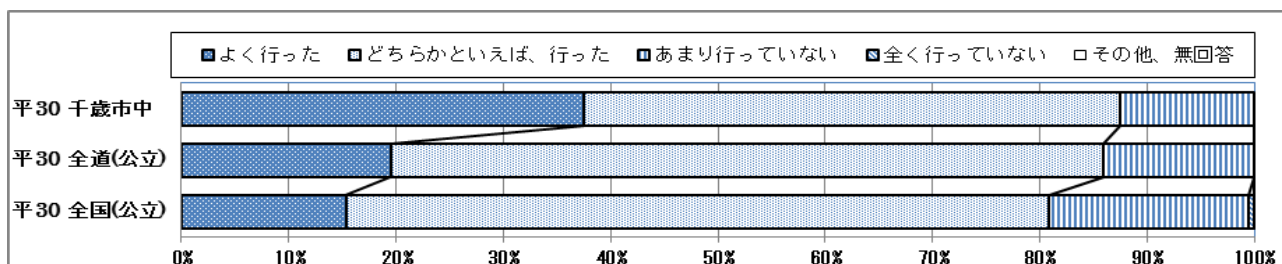
質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
13	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



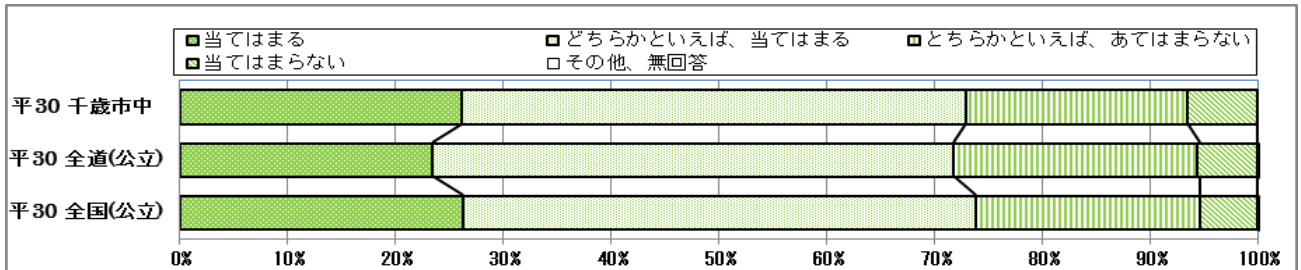
質問番号	質問事項（＊児童質問紙）
55	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



質問番号	質問事項（＊学校質問紙）
13	調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。



質問番号	質問事項（＊生徒質問紙）
52	1，2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。



今年度からの質問

評価や授業に対する教師と児童生徒の意識に隔たりがある。

⑪「よさの評価」では、学校質問紙における「学校生活の中で児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する（褒めるなど）取組をどの程度行ったか」という質問に対して、「よく行った」との回答（小 87.5%、中 81.3%）は、前年度にくらべて小学校、中学校ともに 25.0 ポイント増加し、全国（小 55.7% 中 64.9%）を上回る状況を維持している。一方、児童生徒質問紙で「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」との質問に対して、「当てはまる」と回答した小学生は前年度より 6.4 ポイント減少し 43.5%、中学生では 0.5 ポイント増加し 38.9%である。

⑫「主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善」に関する項目の「調査対象学年の児童（生徒）に対して、習得・活用及び探求の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしたか」という質問に対して、「よく行った」との回答は、小学校では 68.8%、中学校では 25%であり、全国（小 26.8、中 26.1）に比べて小学校ではかなり上回り、中学校はほぼ同様である。さらに「調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思うか」という質問に対して小、中学校ともに 37.5%であり全国（小 16.6、中 15.3）を上回っているが、児童生徒質問紙の「これまでに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思うか」という質問に対して「当てはまる」と回答したのは、小学生 26.6%、中学生 26.1%であり、全国（小 29.1、中 26.3）を下回る。教師と、指導を受ける児童生徒との意識の差は全国よりも大きい。

このような状況から、学校の教育活動全体で行う道徳教育やボランティア活動など、子ども一人一人の思考や活動が活発に展開され、個が認められる場を創出すること、学習の成果や活動の様子等を発信し努力の大切さを認め合う雰囲気を醸成することなど、子どもの自己有用感を高める手だてを工夫し、それぞれの発達段階に応じた積極的な評価を各学校で確実に積み重ねていく必要がある。

さらに、自校の状況を的確に分析し、児童生徒による授業評価の実施や評価項目の見直しなど、より一層、子どもの視点に立った授業改善を進めていくと同時に、子ども一人一人のよさを積極的に見出し、すべての子どもが意欲的に学習に取り組めるよう、自他ともに納得できるほめ言葉、子どもに伝わる言葉を吟味していく必要がある。